

第 1 部 平原古墳群調査報告 4

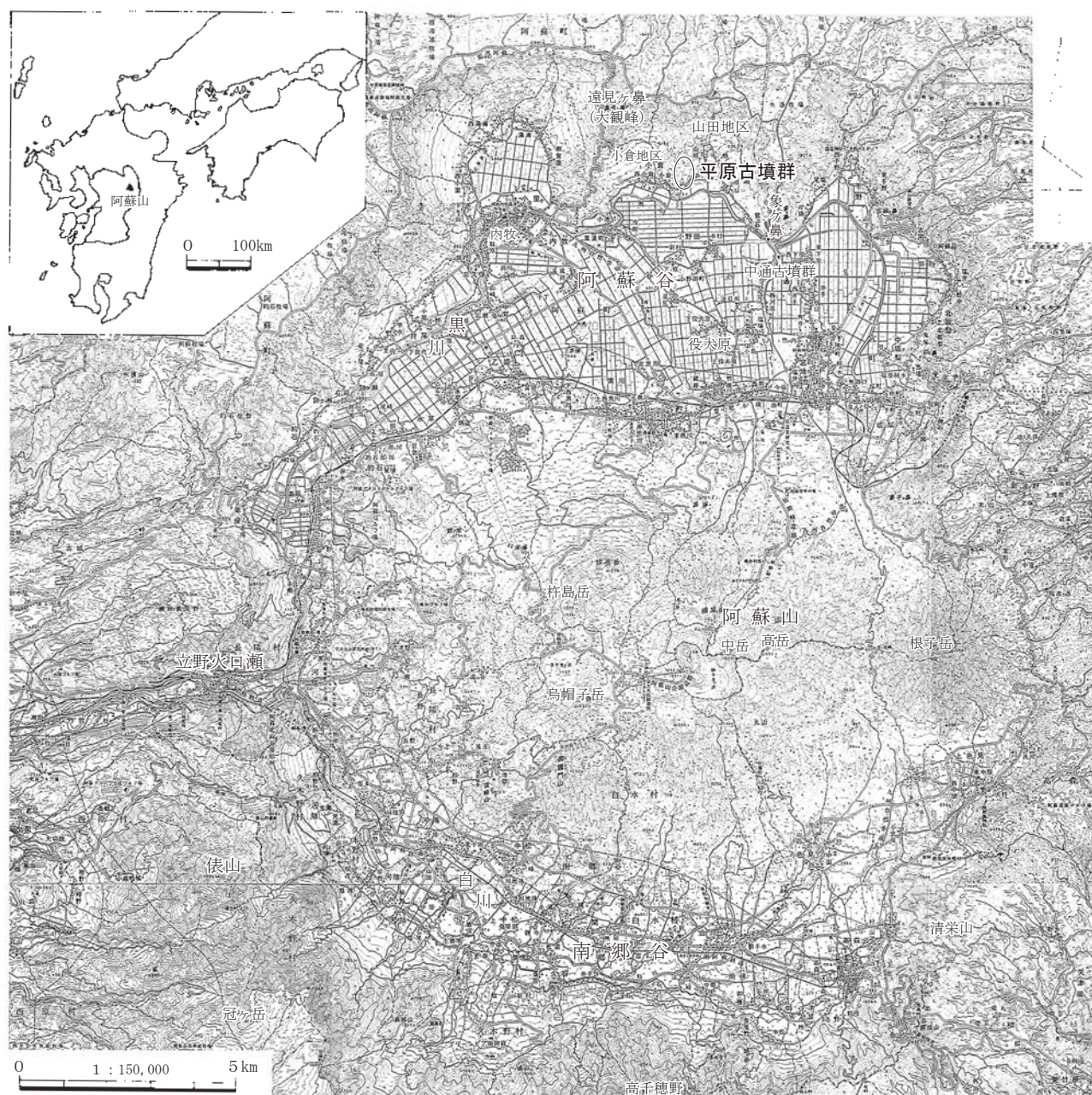


6号墳南2トレンチ調査風景 2019/8/30

一 位置と環境

1. 地理的環境（第1図）

阿蘇の自然 阿蘇地域は熊本県の北東部から大分県西部、宮崎県北西部までを指し、九州のほぼ中央にある阿蘇火山を中心とした地域である。有明海沿岸から約 30 km 離れた内陸部に位置し、標高は約 400 ～ 1500 m で九州の山地型気候区に分類される。阿蘇地域の平均気温は 13℃ 前後であり、夏は涼しいが冬の寒さは厳しい。阿蘇地域には梅雨を中心に多量の雨が降る。阿蘇山の観測所では年間 3000 mm 以上の降水が観測されており、日本でも有数の多雨地帯である。山にしみ込んだ雨水は阿蘇の豊富な地下水の源となる。阿蘇火山は南北約 25 km、東西約 18 km、面積約 380 ㎢ の世界最大級のカルデラをもつ。カルデラ内の火口原は標高 400 ～ 600 m で、それを囲む外輪山とは 300 ～ 700 m のカ



第1図 阿蘇地域の地形と平原古墳群の位置

ルデラ壁と呼ばれる急な斜面で区切られている。カルデラ内は東西に連なる中央火口丘群によって南北に分けられ、北側を阿蘇谷、南側を南郷谷と呼ぶ。阿蘇谷は平坦な土地が広がっているのに対し、南郷谷は段丘面が続いているという地形的な違いがある。阿蘇谷には黒川が、南郷谷には白川が流れている。二つの川はカルデラ西端の南阿蘇村戸下^とで合流して白川となり、カルデラ唯一の切れ目である立野火口瀬を通して熊本平野を流れた後に有明海へ注ぐ。中央火口丘群のなかで最高峰は標高 1592 m の高岳であり、根子岳^{ねこだけ}、中岳^{えぼしだけ}、烏帽子岳^{きしまだけ}と共に阿蘇五岳と呼ばれる。連なった外輪山はカルデラ縁と呼ばれ、その地形は阿蘇谷側と南郷谷側で異なる。阿蘇谷側は標高 600 ～ 800 m 程で火砕流堆積物により平坦な台地となっている。台地上は人間の手による野焼きが行われ、草原が広がっており、放牧、採草等の用途で利用される。一方南郷谷側は標高 900 ～ 1200 m と高く、稜線も険しい。この違いはカルデラ縁の外側の斜面に起因する。阿蘇谷側は緩やかな傾斜に多量の火砕流堆積物が堆積したのに対し、南郷谷側では切り立った斜面であったため、現在でもカルデラ形成以前の火山の険しい稜線が見られる。

阿蘇カルデラの形成 阿蘇山の火砕流噴火は 27 万年前に一回目が起こった後、十数万年の休止期を挟んで 14 万年前、12 万年前、9 万年前の計四回起こり、その都度カルデラが形成され現在の阿蘇カルデラになったと考えられている。この四回の噴火の火砕流堆積物は阿蘇火砕流堆積物と呼ばれ、どの噴火で形成されたかにより Aso - 1 ～ 4 に分けられる。最後の噴火が起こった後、阿蘇カルデラには三度カルデラ湖が形成されたことがわかっている。はじめにできたカルデラ湖は古阿蘇湖と呼ばれる。水中で形成される堆積層が Aso - 4 の直上に存在したことでカルデラ湖の存在が示された。この湖は、カルデラ唯一の切れ目である立野火口瀬が開いたことで消滅した。次に形成されたのが久木野湖であり、中央火口丘群の溶岩が立野火口瀬をせき止めたことで形成された。範囲は南郷谷に限定されていたと推測され、約 4 万年前に消滅した。最後に形成されたのが阿蘇谷湖である。湖水性堆積物の調査から少なくとも約 6300 年前までには消滅していたと考えられている。縄文晩期までの遺跡が阿蘇谷の中心部に存在しないことから、湖がなくなった後は湿地となったことが推測される。また、現在見られる中央火口丘群の多くの火山は阿蘇谷湖が存在した時期に誕生したものである。

地質 ボーリング調査の結果によれば阿蘇谷の地質は古いものから花崗岩類、先阿蘇火山岩類、阿蘇火砕流堆積物、カルデラ埋積層、中央火口丘の火山岩類、地層の最上部を赤ボク、黒ボクと呼ばれる新規火山灰層が覆っている。花崗岩類は阿蘇火山体の基盤を成している地層である。先阿蘇火山岩類は阿蘇火砕流が噴出する以前の火山岩類である。阿蘇火砕流堆積物は、カルデラ形成時の噴火活動で形成された層である。Aso - 1 ～ 3 は噴出時に高温であったため軽石や火山灰が強く融合して溶結凝灰岩となっている。一方 Aso - 4 の大部分は軽石を多く含んだ軽石凝灰岩として存在している。これらは加工の容易さから古来より石材として用いられてきた。カルデラ埋積層はカルデラ湖にシルト、砂、礫などが堆積して形成され、阿蘇谷層や内牧層と呼ばれる。中央火口丘の火山岩類はカルデラ埋積層の間に中央火口丘群からのびるように存在し、その亀裂部は山に降った雨水を阿蘇谷に運ぶ道筋となる。新規火山灰層の黒ボク層、赤ボク層は火山灰と植物の腐植によって形成され、黒ボク土と赤ボク土の色調の違いは火山灰の供給と腐植生産の割合により生じる。新規火山灰層を細かく見ると、最上層から黒ボク層、アカホヤ層、ローム層、始良丹沢火山灰層という順に積み重なる。阿蘇市赤水付近では沼鉄鉱層が見られる。沼鉄鉱は褐鉄鉱（リモナイト）の一種である。水中の鉄分が酸化作用を受けて沈殿したもので、阿蘇地域では阿蘇谷湖で形成された。阿蘇地域の遺跡に用いられたベンガラは沼鉄鉱を焼いて作られたと推測される。

（吉田）

2. 歴史的環境

(1) 阿蘇の歴史

旧石器時代 旧石器時代の遺跡は外輪山上部に多く分布している。これは当時、カルデラ湖が存在していたためであると考えられる。なかには阿蘇市象ヶ鼻遺跡のように石器石材の露頭や湧水が見られる遺跡もあり、そうした場所は当時キャンプ地として利用されていたことが推測される。阿蘇市長倉坂遺跡においては細石刃が出土している。そのため旧石器時代終末期には狩猟採集活動の範囲が次第にカルデラ内まで広がっていったと考えられている。

縄文時代 縄文時代の遺跡は外輪山上部からカルデラ内斜面の中腹部に分布している。これは人々が気候の温暖化やカルデラ湖の水位の低下を受けて、生活圏を広げたためであると考えられる。土器は草創期から晩期のものまで幅広く出土している。また、阿蘇市千部塚遺跡^{せんべづか}では瀬戸内系土器が出土しており、他地域との交流があった可能性を示すものとして注目されている。これらの背景には、阿蘇地域が九州の中央にあり、様々な水系の源流となっていることがあげられる。

弥生時代 人々はカルデラ内の平地へ移動していったと考えられ、弥生時代の遺跡はカルデラ内の外輪山麓や河川の自然堤防上、火口丘の微高地に分布し、その数は中期から後期にかけて増加している。遺跡は南郷谷よりも阿蘇谷、特にその西部に集中している。当地域は褐鉄鉱（リモナイト）の産出地であり、人々はこれを元に赤色顔料であるベンガラを生成していた。一部の遺跡からは北部九州とつながりのある青銅器も見つかっており、当時の人々がこのベンガラを交易品として他地域との交流を行っていたと考えられている。また、後期の遺跡では鉄器が多数出土することから、鉄製品の交易だけでなく、褐鉄鉱（リモナイト）を原料とした当地域での鉄製錬が行われていた可能性も指摘されている。阿蘇谷では以前から、約 1500 点もの鉄器が出土した阿蘇市下扇原遺跡^{しもおうぎばら}のほか多くの遺跡で鉄器が見つかった。そのため、長年研究者のあいだでは鉄器保有の点において阿蘇谷が優位であると認識されていた。しかし南郷谷の高森町幅・津留遺跡^{はばつる}で近年発掘調査が行われた結果、約 700 点もの鉄器が出土した。これにより、鉄器保有の点におけるこれまでの見解に見直しが迫られることとなった。阿蘇地域の農耕については、阿蘇市前田遺跡をはじめとする中期の遺跡から石包丁が出土していることから、この時期にはすでに稲作が導入されていた可能性が考えられている。しかし、水田遺構が発見されていないため、結論を出すまでには至っていない。

古墳時代 古墳時代は、阿蘇谷東部に集中して古墳が築造されている。当時の集落については調査が進んでおらず、その実態はいまだ不明であるが、稲作に適した環境であり生産性の高い阿蘇谷東部を中心に集落が形成されていたと推測されている。阿蘇地域における古墳の変遷として、古墳時代前期には、阿蘇市村下石棺群に見られるような箱式石棺や、それを主体部とした方形周溝墓が築造される。前期後葉から中期になると、阿蘇市中通古墳群で見られるような前方後円墳や円墳が阿蘇谷を中心として築造されるようになる。後期に入ると古墳の主体部として横穴式石室が採用され、墳丘の規模もやや縮小した。すでに消滅しているが、横穴式石室をもつ阿蘇市迎平 6 号墳^{むかえびら}からは環状乳画文帯神獣鏡が出土している。後期後半になると、阿蘇溶結凝灰岩や一部に安山岩を用いた複室構造・両袖式の横穴式石室が阿蘇市上御倉古墳^{かみみくら}・下御倉古墳^{しもみくら}で採用された。このほか、後期には横穴の築造も阿蘇谷・南郷谷の両地域で行われた。

奈良時代以降 7 世紀末に肥後国が成立し、それと同時に阿蘇郡も設置された。郡衙は現在の阿蘇市一の宮町役大原地区におかれたと考えられており、郡司は阿蘇国造の系譜である阿蘇氏が務めた。後に阿蘇氏は大宮司職を称し、中世の肥後国において菊池氏と並ぶ勢力を誇った。 (内門)

(2) 九州の大型円墳 (第1・2表)

第六章で述べるように、今年度の測量調査の結果、平原8号墳は直径60mを超える大型円墳である可能性が考えられた。そこで、平原8号墳が阿蘇地域に築造された意味を考察するため、周辺地域の大型円墳についての情報を得ようと試みた。九州の大型円墳に関する集成は『古代学研究』第123号(森編1990)において福岡・佐賀・長崎・宮崎・鹿児島がまとめられているが、大分や熊本では、まとめられていない。よって今回は、集成を行うことで九州における大型円墳の様相解明に努めたいと思う。

今回の検討では、直径が30m以上の円墳を大型円墳として集成した。文献は、九州前方後円墳研究会の大会資料(九州前方後円墳研究会2006・2007・2008・2009・2010)を主軸に据え、その他、各報告書や自治体史を参考にした。情報の乏しいものについては、検討対象を増やすために各自治体のホームページも適宜参照した。なお、時期は古墳時代前期を前方後円墳集成編年(広瀬1991)(以下集成編年とする)1～4期前半、中期を4期後半～8期、後期を9～10期、終末期をそれ以降とする。

筑前地域 前期は、直径42mの忠隈古墳や直径30mの辻古墳など割竹形木棺を埋葬施設とした大型円墳が遠賀川流域でわずかに見られるが、その他の地域には分布しない。中期になると築造数が増加すると同時に分布域も拡大し、鞍手や若宮といった遠賀川流域および宗像や糸島平野に見られるようになる。なかでも糸島平野の釜塚古墳^{かまつか}は直径が56mであり、竪穴系横口式石室を埋葬施設とすることで注目される。後期には築造数が減少し分布域も縮小するが、横穴式石室を埋葬施設とした大型円墳が福岡平野で見られるようになる。

筑後地域 前期は箱式石棺を埋葬施設とする^{くぐりづか}潜塚古墳が諏訪川流域に築造されている。中期には筑後川流域左岸に直径56mの^{ごんげんづか}権現塚古墳が、筑紫野に横穴式石室を埋葬施設とする直径35mの大振山古墳が築造されるものの、他地域と比べると大型円墳の築造は低調である。後期になると築造数・分布域ともに拡大する。^{ごろうやま}五郎山古墳のような横穴式石室を埋葬施設とする大型円墳が筑紫野・久留米・八女・朝倉・浮羽など各地に築造される。これらには、装飾を伴うものも多い。

肥前地域 前期は肥前西部地域に丸塚古墳が築造される。また、肥前東部の三根において割竹形木棺を埋葬施設にもつ直径32mの^{めすづか}雌塚古墳が築造される。中期になると大型古墳の築造数が増加し、分布も拡大する。特に中期前半は肥前東部の佐嘉といった背振山地の南麓に築造が目立ち、中期の後半になると小城・武雄・杵島・唐津に築造されるようになる。これら中期の大型円墳の多くは、横穴式石室を導入している。後期には直径50mの田代太田古墳など^{きい}基肄・^{やぶ}養父において大型円墳が見られる。なお、肥前西部地域は大型円墳の築造数が非常に少なく、上述した丸塚古墳が見られるのみである。

肥後地域 前期には竪穴式石室を埋葬施設とする大王山古墳3号が八代海を臨む丘陵部に築造されるが、このほかに大型円墳は認められない。中期前半には緑川流域において横穴式石室を埋葬施設とする直径54mの^{おさか}小坂大塚古墳が、中期中葉には菊池川流域において舟形石棺を埋葬施設とする直径53mの^{じおんじきょうづか}慈恩寺経塚古墳が築造されるなど、中期になると大型円墳の築造数が大幅に増加し、諏訪川流域・菊池川流域・白川流域・緑川流域、そして阿蘇谷などこれまでに見られなかった地域に大型円墳が築造されるようになる。後期になると大型円墳の築造数は減少するが、横穴式石室を埋葬施設として菊池川流域や宇土半島・阿蘇谷といった地域において見られる。なお、時期不明ではあるが球磨地域に直径38mの四ツ塚古墳群仮1号墳が築造されている。本古墳は九州西側における大型円墳の

分布の南限であると考えられる。

壱岐地域 前期から中期にかけて大型円墳は見られない。後期になると壱岐中央部において長大な石室をもつ直径 45 m の鬼の窟古墳や直径 54 m の ^{ひょうぜ}兵瀬古墳などが見られる。当地域で見られる大型円墳 4 基のすべてが集成編年 10 期頃に築造されている。

豊前地域 この地域に前期の大型円墳は見られず、中期から大型円墳が見られるようになる。時期の判明しているものでは、宇佐平野における ^{くずわら}葛原古墳が初現である。その後、横穴式石室を埋葬施設とする田川盆地のセスドノ古墳や墳長 68 m の造出付円墳である石並古墳が ^{いしなみ} ^{みやこ}京都平野に築造される。後期には築造数が減少するが、中津平野の ^{あながはやま}穴ヶ葉山古墳群 1 号墳や、京都平野の綾塚古墳などが築造される。

豊後地域 この地域に前期の大型円墳は見られない。中期には、国東半島東部に ^{おとうやま}御塔山古墳が築造される。直径 75 m の大型円墳で、造出を含めると 80 m にもなるため、前方後円墳の被葬者にも劣らない権力をもった者が葬られていると推測される。このほか、中期には日田盆地や大分平野・ ^{あまべ}海部地域・大野川流域など豊後地域各地に大型円墳が築造される。後期になると、築造数は減少する。別府湾を臨む丘陵上に装飾古墳である鬼ノ岩屋 1・2 号墳が築造される。鬼ノ岩屋 1 号墳は阿蘇市上御倉古墳と石室構造が類似している古墳である。

日向地域 前期は大淀川下流域右岸の ^{いきめ}生目古墳群中において 2 基見られるものの、その他の地域には見られない。中期には、 ^{ひとせ}一ツ瀬川下流域右岸に所在する西都原古墳群中に ^{おさほづか}男狭穂塚古墳・ ^{めさほづか}女狭穂塚古墳の陪塚として、直径 50 m 程の大型円墳が 2 基見られる。また、 ^{ごかせ}五ヶ瀬川下流域や ^{おまる}小丸川下流域左岸、大淀川上流域でも大型円墳が見られる。後期になると埋葬施設として横穴式石室を導入した大型円墳が一ツ瀬川下流域や大淀川下流域右岸に見られる。

大隅地域 現在、前期の大型円墳は見られない。中期になると、志布志地域の菱田川右岸に直径 40 m の原田古墳が見られるが、後期には大型円墳が見られなくなる。時期不明ではあるが、日本最南端の前方後円墳である塚崎 39 号墳の南西に、直径 50 m 超の塚崎 42 号墳が存在しており、このほか唐仁古墳群中に直径 40 m 程の大型円墳が 2 基確認できる。当地域は、時期の判明しているものが少ないだけでなく、大型円墳の築造数自体が非常に少ないという特徴をもつ。不明な点がまだまだ多く、今後の調査・研究が待たれる。

対馬地域・薩摩地域 現在、この地域に大型円墳は見られない。

九州の大型円墳 これまでに各地域の大型円墳の様相について述べてきたが、古墳数の増減や分布域の拡張について大まかな傾向が読み取れたため、3 項目に整理した。

1. 前期の大型円墳は筑前・肥前・肥後・日向など各地に見られるが、その数は少ない。
2. 中期には築造数の増加および分布域の拡大が見られる。遠賀川流域や宗像地域、菊池川流域での築造が目立つほか、これまでに見られなかった平野や盆地に大型円墳の築造が見られるようになる。
3. 後期には、築造数が減少し分布域も限定されるが、筑後や壱岐では反対に、大型円墳の築造が活発化している。

以上、九州における大型円墳の様相をまとめた。整理した事柄の背景を考察する際、前方後円墳や中小古墳築造の流れの中で大型円墳がどのように築造されたかを考えることが重要となるだろうが、今回は傾向を述べるにとどめ、今後の課題としたい。

(石本・内門・河内・河野・小堀・西・姫野・廣重・松本青・松本健・牟田・吉田)

一 位置と環境

第 1 表 九州の大型円墳一覧表（1）

No.	遺跡名	所在地	直径（m）	埋葬施設	時期	装飾	備考	文献
1	大城大塚古墳	遠賀郡芦屋町大城	22 × 36	横穴式石室	6 期			59, 62, 112
2	新延大塚古墳	鞍手郡鞍手町新延	30	横穴式石室	9 期			60, 118
3	鑑塚古墳群 1 号	鞍手郡鞍手町新延	38		5 世紀前半			81, 116
4	竹原八幡塚古墳	宮若市竹原	35	堅穴系横口式石室	7 期		石室の内側に赤色顔料	16, 35
5	池田桜（田野桜）B-03（3）号	宗像市池田	30	横穴式石室	7 世紀前半			5, 6, 88
6	勝浦高堀古墳	福津市勝浦	30-40		7 期		前方後円墳の可能性ある	4, 7
7	勝浦高原古墳群 13 号	福津市勝浦	31		10 期			4, 5, 107
8	新原・奴山古墳群 25 号	福津市勝浦	35-36		6 期			51, 110
9	宮地嶽古墳	福津市宮司元町	東西 34、南北 27	横穴式石槨	7 世紀前半		古墳の周囲に列石	5, 6, 62
10	須多田ニタ塚古墳	福津市須多田	33. 5-34	横穴式石室	7 期		石室に赤色顔料を塗布	3, 5
11	熊野神社古墳	糟屋郡粕屋町内橋	30	箱式石棺	5 世紀前半			108
12	有田遺跡群 1 号	福岡市早良区小田部	30					108
13	今里不動古墳	福岡市博多区金隈	34-36	横穴式石室	10 期			94, 95, 108
14	釜塚古墳	糸島市神在	56	堅穴系横口式石室	6 期			21, 35
15	泊城崎古墳	糸島市柏	32 以上		5 世紀前葉			81, 108
16	向上 2 号	糸島市末松	40	横穴式石室	後期			81, 108
17	曾根孤塚古墳	糸島市曾根	30-33	横穴式石室、堅穴式小石室	5 期			59, 62, 81
18	辻古墳	飯塚市菰田	30	粘土槨、割竹形木棺	4 期			35, 49
19	忠隈古墳	飯塚市忠隈	42	堅穴式石槨、割竹形木棺	1-2 期			35, 105
20	次郎太郎古墳群 3 号	嘉麻市漆生	40		6-8 期			59, 99
21	狐塚古墳	朝倉市入地	40?	横穴式石室	7 世紀初頭	○		97
22	本陣古墳	朝倉市山田	40					58, 62, 97
23	仙道古墳	朝倉郡筑前町久光	35		10 期	○		93
24	五郎山古墳	筑紫野市原田	34	横穴式石室	6 世紀後半	○		22
25	大振山古墳（巡り尾 I-23 号墳）	筑紫野市原田美ヶ丘	35	横穴式石室	5 世紀後半		二段築成	31
26	朝田古墳群塚花塚古墳	うきは市浮羽町朝田	30	横穴式石室		○		60, 61, 62
27	楠名古墳	うきは市浮羽町朝田	32	横穴式石室	7 世紀前半			35, 61
28	吉木古墳群下馬場古墳	久留米市草野町吉木	42	横穴式石室	6 世紀後半	○		108
29	大塚古墳群 3 号	久留米市田主丸町石垣	54					36
30	権現塚古墳	久留米市大善寺町宮本	56		8 期			35, 60, 64
31	本古墳群真浄寺 2 号（本 6 号）	八女市忠見	35	堅穴系横口式石室				47, 62
32	八女古墳群弘化谷古墳	八女郡広川町広川	39	石屋形	10 期	○		27, 35, 47
33	立山山古墳群 8 号	八女市本	34	横穴式石室				47
34	丸山塚古墳	八女市宅間田	33	横穴式石室		○		108
35	童男山古墳群 1 号	八女市山内	48	横穴式石室、割貫石棺				60, 61, 62
36	八女古墳群岩戸山 4 号（下茶屋古墳）	八女市吉田	30	横穴式石室				1, 61, 62
37	立花大塚古墳	八女市立花町北山	31	横穴式石室	6 世紀後半			25, 62
38	権現塚古墳	みやま市瀬高町坂田	45					108
39	潜塚古墳	大牟田市黄金町	25-30	箱式石棺	1 期		前方後円墳の可能性ある	13, 58, 84
40	牛原原田遺跡 A 地区 6 号	鳥栖市牛原町	44	横穴式石室	終末期			91
41	柚比古墳群田代太田古墳	鳥栖市田代本町太田	50	横穴式石室	10 期	○		61
42	姫方遺跡雌塚古墳	三養基郡みやき町養原	32	割竹形木棺	4 世紀後半			27, 28
43	姫方遺跡雄塚古墳	三養基郡みやき町養原	30	堅穴式石室	5-6 期		1972 年の緊急調査時に消滅	27, 28
44	目達原古墳群古稲荷塚古墳	三養基郡上峰町坊所	35	横穴式石室	6 世紀前半			26, 27
45	西隈古墳	佐賀市金立町金立	30-40	横穴式石室	5 世紀後半	○		26, 27, 35
46	五本黒木丸山古墳	佐賀市金立町金立	34	横穴式石室	5 世紀中頃			26, 27, 62
47	山王山古墳	佐賀市久保泉町川久保	40	堅穴式石室	5 世紀前半			26, 27, 62
48	熊本山古墳	佐賀市久保泉町川久保	30	舟形石棺				58, 62
49	円山古墳	小城市三日月町織島	46	横穴式石室	5 世紀後半			26, 27
50	樋の口古墳	唐津市鏡	30	横穴式石室	5 世紀後半			35, 62
51	小山田古墳	唐津市浜玉町東山田	32					62
52	横田下古墳	唐津市浜玉町横田下	30	横穴式石室	5 世紀前半			26, 27, 59
53	鼓古墳群第 4 号	唐津市湊町岡	30				内部主体消失	24, 42
54	学校東側古墳第 1 号	唐津市湊町神集島	30	箱式石棺	中期前葉			24, 42
55	玉島古墳	武雄市橘町大日	45-48	横穴式石室	5 世紀末葉			26, 27, 62
56	船野山古墳群 1 号（かぶと塚）	杵島郡白石町堤	40	横穴式石室	5 世紀末葉			26, 27
57	鬼塚古墳	鹿島市納富分	30	横穴式石室	7 世紀前半		前方後円墳の可能性ある	26
58	丸塚古墳	雲仙市吾妻町本村名	30		4 世紀前半			27
59	別当塚東古墳	荒尾市本井手	40-44	堅穴系横口式石室	6-7 期			57
60	別当塚西古墳	荒尾市本井手	29-30					57
61	弁財天古墳	玉名市岱明町高道	40	横穴式石室	8 期		初期の石屋形	60, 117
62	伝左山古墳	玉名市繁根木	35	横穴式石室	8 期		同墳丘内に舟形石棺の埋設	59, 60, 117
63	天水経塚古墳	玉名市天水町部田見	50	舟形石棺	5 期			58
64	天水小塚古墳	玉名市天水町部田見	33		5-7 期			58, 76
65	金屋塚古墳	山鹿市石	30		8 期			60, 90
66	馬見塚古墳群 5 号	山鹿市方保田	38. 5		中期			80
67	馬塚古墳	山鹿市城	30	横穴式石室	9 期	○		60, 89
68	猿楽塚古墳	山鹿市名塚	30					80
69	津袋大塚古墳	山鹿市鹿本町津袋	32	舟形石棺	4 世紀末葉		周溝近くより 3 基の石棺	71
70	灰塚古墳	山鹿市菊鹿町池永	44	石蓋土壙墓、木棺墓	6 世紀初頭?			44
71	西手野古墳群上御倉古墳	阿蘇市一の宮町手野	33	横穴式石室	10 期			56
72	西手野古墳群下御倉古墳	阿蘇市一の宮町手野	30	横穴式石室	10 期			56
73	中通古墳群車塚 A 古墳	阿蘇市一の宮町中通	42					37, 50
74	中通古墳群鞍掛塚 A 古墳	阿蘇市一の宮町中通	35					37, 50
75	中通古墳群勝負塚古墳	阿蘇市一の宮町中通	58. 7					37, 50

第2表 九州の大型円墳一覧表(2)

No.	遺跡名	所在地	直径 (m)	埋葬施設	時期	装飾	備考	文献
76	塩塚古墳	阿蘇市一の宮町宮地	30	横穴式石室	8-9期			19, 50
77	平原古墳群 6号	阿蘇市山田	東西 31、南北 30		6期			115
78	平原古墳群 8号	阿蘇市山田	東西 60.3、南北 65.5		6-7期			
79	黒松古墳群 1号 (ヌレ観音古墳)	合志市合生	37		5-6期		墳丘裾付近に箱式石棺 1基を確認	37
80	生坪塚山古墳	合志市合生	36					37
81	慈恩寺経塚古墳	熊本市北区植木町米塚	53	舟形石棺	7期			59, 75
82	羽山塚古墳	熊本市北区飛田	41	箱式石棺	5世紀中葉			33
83	打越稲荷山古墳	熊本市北区打越町	30	横穴式石室	10期	○		53, 60
84	塚原古墳群 石之室古墳	熊本市南区城南町塚原	31	家形石棺	8期	○		60, 72
85	塚原古墳群 三段塚古墳	熊本市南区城南町塚原	33					30
86	小坂大塚古墳	上益城郡御船町小坂	54	横穴式石室	4世紀末葉			17
87	井寺古墳	上益城郡嘉島町井寺	30m 前半台	横穴式石室	8期	○		85
88	北園鬼塚古墳	宇城市不知火町小曾部	40	横穴式石室	10期			45, 60
89	大王山古墳 3号	八代郡氷川町早尾	30	竪穴式石室	4期			58
90	四ツ塚古墳群 仮 1号墳	球磨郡錦町木上南	38				墳丘規模はGoogle Earthで計測した	
91	沓岐古墳群 掛木古墳	沓崎市勝本町布気触	30	横穴式石室	10期		墳丘裾が大きく削られている	26, 102
92	沓岐古墳群 佐塚古墳	沓崎市勝本町百合畑触	38	横穴式石室	10期			26, 66, 102
93	沓岐古墳群 兵瀬古墳	沓崎市芦辺町国分本村触	54	横穴式石室	7世紀初頭			26, 111
94	沓岐古墳群 鬼の窟古墳	沓崎市芦辺町国分本村触	45	横穴式石室	10期			26, 35, 102
95	円山古墳	京都府葛飾町尾倉	36	石室			消滅	70, 79
96	矢留二升五合古墳	行橋市矢留	約 30	石室				14
97	稲童古墳群 並古墳 (20号)	行橋市稲童	68		6-7期		造出付円墳	104, 113
98	綾塚古墳	京都府みやこ町勝山黒田	41	横穴式石室	7世紀初頭			61, 78
99	台ヶ原古墳群 1号	京都府みやこ町豊津	約 28		5世紀			55, 108
100	彦徳甲塚古墳	京都府みやこ町豊津	29	横穴式石室	10期			61, 73
101	大熊南古墳	京都府みやこ町犀川	約 30					29
102	古川大塚古墳	京都府みやこ町犀川	40		5世紀中葉			41, 108
103	セストノ古墳	田川市伊田	37	横穴式石室	7期			48, 62, 104
104	伊方古墳	田川郡福智町伊方	32	横穴式石室	10期			15, 60, 61
105	穴ヶ葉山古墳群 1号	筑上郡上毛町下唐原	東西 27、南北 30	横穴式石室	10期	○		60, 61, 92
106	葛原古墳	宇佐市葛原	56		5-6期		南側に張出部	38, 104
107	扇塚古墳	宇佐市城井	約 45					18, 23
108	高倉古墳	宇佐市長洲	約 30	(伝) 箱式石棺	5世紀代?			23
109	入津原丸山古墳	豊後高田市新栄	77	箱式石棺	5期		造出付円墳	62, 69
110	御塔山古墳	杵築市狩宿	約 80 (造出を含む)		5期		造出付円墳	39, 62, 67
111	狐塚古墳	国東市浜崎	35	箱式石棺	前期			69
112	鬼ノ岩屋・実相寺古墳群 鬼ノ岩屋 1号	別府市北石垣	31	横穴式石室	10期	○		60, 62, 87, 114
113	鬼ノ岩屋・実相寺古墳群 鬼ノ岩屋 2号	別府市北石垣	37.5	横穴式石室	10期	○		59, 60, 61, 87, 114
114	丸山古墳	大分市永興	約 30					98
115	大在古墳	大分市角子原	35		6期			61, 68
116	丸山古墳	豊後大野市朝地町上尾塚	32		7-8期		墳丘の 100m 南東側に石棺蓋がある	106, 51
117	早尾原古墳	豊後大野市朝地町上尾塚	30	箱式石棺				96
118	御塚古墳	豊後大野市大野町藤北	33					51
119	薬師堂山古墳	日田市田島	38	竪穴式石室 or 箱式石棺	5期			52, 67
120	南方古墳群 地蔵ヶ森古墳	延岡市野地町	32	粘土槨			所在不明	100, 101
121	南方古墳群 41号	延岡市野地町	38.5		中期			10, 65
122	富高古墳群 1号	日向市富高	38		中期			100
123	新田原古墳群 140号	児湯郡新富町新田	30					100
124	富田古墳群 1号	児湯郡新富町三納代	34		6世紀代			2
125	西都原古墳群 111号	西都市三宅	29.5-30	木棺直葬	5世紀後半			35, 62, 83
126	西都原古墳群 169号	西都市三宅	44-50		5期		女狭徳塚古墳の陪塚	59, 62, 86
127	西都原古墳群 170号	西都市三宅	45-56		5期		男狭徳塚古墳の陪塚	56, 62, 86
128	西都原古墳群 206号 (鬼の窟)	西都市三宅	33-37	横穴式石室	10期			77
129	本庄古墳群 8号	東諸県郡国富町本庄	33				墳頂部は平坦に削られている	32, 65
130	本庄古墳群 31号	東諸県郡国富町本庄	35				墳丘裾部に地下式横穴がある	32, 65
131	生目古墳群 2号	宮崎市跡江	27-30		前期末葉		墳丘下に玄室を設ける地下式横穴がある	12
132	生目古墳群 9号	宮崎市跡江	34-38		2期		33号墳を後方部とする前方後円墳の可能性	11
133	福長院塚古墳	宮崎市恒久	43	横穴式石室	10期			100
134	高崎塚原古墳群 5号	都城市高崎町江平	30					100
135	高城牧ノ原古墳群 2号	都城市高城町大井手	31.2	箱式石棺	中期			100
136	福島古墳群 9号 (霧島塚)	串間市西方	35				墳丘の破壊が著しい	100
137	原田古墳	志布志市有明町原田	40		中期		造出付円墳の可能性はある	65, 82
138	唐仁古墳群 17号 (福留塚)	肝属郡東串良町新川西	44					20
139	唐仁古墳群 33号 (向塚)	肝属郡東串良町新川西	43.6					20
140	塚崎古墳群 42号	肝属郡肝付町野崎	50 超				自然丘陵の可能性はある	54

第1・2表に関する参考文献

- 1 赤崎敏男編 1987『岩戸山古墳群』八女市文化財調査報告書第15集 八女市教育委員会
- 2 有馬義人 1996『弁指平遺跡 花園遺跡 比良横穴墓群 富田1号墳 新田原61号墳 平成7年度町内遺跡発掘調査概要報告書』新富町文化財調査報告書第20集 新富町教育委員会
- 3 池ノ上宏編 1996『須多田古墳群』津屋崎埋蔵文化財調査報告書第12集 津屋崎町教育委員会
- 4 池ノ上宏編 2002『津屋崎町内遺跡』津屋崎町文化財調査報告書第19集 津屋崎町教育委員会
- 5 池ノ上宏・田上浩司編 2004『津屋崎古墳群Ⅰ』津屋崎町文化財調査報告書第20集 津屋崎町教育委員会
- 6 池ノ上宏・花田勝弘 1999「筑紫・宮地嶽古墳の再検討」『考古学雑誌』第85巻第1号 日本考古学会
- 7 池ノ上宏・吉田東明編 2011『津屋崎古墳群Ⅱ』福津市文化財調査報告書第4集 福津市教育委員会
- 8 池畑耕一 1992「大隅」『前方後円墳集成』九州編 山川出版社
- 9 池畑耕一 1992「薩摩」『前方後円墳集成』九州編 山川出版社
- 10 石川恒太郎編 1979『史跡南方古墳群保存管理計画書』延岡市教育委員会
- 11 石村友規・竹中克繁編 2015『生目古墳群Ⅴ 生目9・11・12・33号墳発掘調査報告書』宮崎市文化財調査報告書第108集 宮崎市教育委員会
- 12 石村友規編 2018『生目古墳群Ⅶ 生目1・2・24・25・26号墳発掘調査報告書』宮崎市文化財調査報告書第122集 宮崎市教育委員会
- 13 石山勲 1992「筑後」『前方後円墳集成』九州編 山川出版社
- 14 伊藤昌広・中原博編 2010『行橋市内遺跡等分布地図』行橋市文化財調査報告書第37集 行橋市教育委員会
- 15 井上勇也編 2007『伊方古墳』福智町文化財調査報告書第1集 福智町教育委員会
- 16 井上裕弘編 1979『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第13集 福岡県教育委員会
- 17 上坂暖子編 2019『小坂大塚古墳』御船町文化財調査報告書第6集 御船町教育委員会
- 18 宇佐市史刊行会 1975「扇塚古墳」『宇佐市史』上巻 宇佐市史刊行会
- 19 江本直編 1980『車塚古墳・川田京坪遺跡・川田小筑遺跡・塩塚古墳』熊本県文化財調査報告第46集 熊本県教育委員会
- 20 大崎彩ほか編 2017『唐仁古墳群3』東串良町埋蔵文化財発掘調査報告書（6）鹿児島県肝属郡東串良町教育委員会
- 21 岡部裕俊・鈴木三男・小川とみ編 2003『国史跡 釜塚古墳』前原市文化財調査報告書第81集 前原市教育委員会
- 22 小田富士雄編 1998『国史跡五郎山古墳—保存整備事業に伴う発掘調査—』筑紫野市文化財調査報告書第57集 筑紫野市教育委員会
- 23 賀川光夫 1976「古墳時代」『大分の歴史』（1）ふるさと誕生 大分合同新聞社
- 24 唐津市 1991『唐津市史』復刻版 唐津市
- 25 川述昭人編 1984『大塚古墳 福岡県八女郡立花町北山所在古墳の調査』立花町文化財調査報告書第1集 立花町教育委員会
- 26 蒲原宏之・本田秀樹 1990「佐賀・長崎県」『古代学研究』第123号 古代学研究會
- 27 蒲原宏之・田平徳栄・宮崎貴夫 1992「肥前」『前方後円墳集成』九州編 山川出版社
- 28 木下巧・木下之治・柴元静雄・天本洋一 1974『姫方遺跡—三養基郡中原町』佐賀県文化財調査報告書第30集 佐賀県教育委員会
- 29 木村達美編 2003『犀川町内遺跡等分布地図』犀川町文化財調査報告書第8集 犀川町教育委員会
- 30 清田純一編 1995『史跡・塚原古墳群—保存整備事業報告書』熊本県城南町教育委員会
- 31 草場啓一編 1993『原田地区遺跡群』筑紫野市文化財調査報告書第37集 筑紫野市教育委員会
- 32 国富町教育委員会・株式会社エスティ環境設計研究所 2016『史跡 本庄古墳群保存管理計画書』国富町
- 33 隈昭志・桑原憲彰編 1979『羽山塚古墳調査報告書』九州産業交通株式会社
- 34 隈昭志 1992「肥後」『前方後円墳集成』九州編 山川出版社
- 35 広瀬和雄・和田晴吾編 2011「九州」『講座日本の考古学 古墳時代（上）』第7巻 青木書店
- 36 栗原和彦編 1984『田主丸古墳群 福岡県浮羽郡田主丸町所在群集墳の調査』田主丸町文化財調査報告書第1集 田主丸町教育委員会
- 37 甲元眞之・岩崎（山下）志保・蔵富士寛編 1994『熊本大学文学部考古学研究室研究報告』第1集 熊本大学文学部考古学研究室
- 38 小倉正五・佐藤良二郎 1989「葛原古墳再考」『古文化談叢』第20集 発刊記念論集（下）九州古文化研究会
- 39 後藤方彦ほか 2013『御塔山古墳発掘調査報告書』大分県杵築市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集 杵築市教育委員会
- 40 小林行雄編 1972『装飾古墳』平凡社
- 41 犀川町誌編纂委員会編 1994「五 犀川の古墳時代」『犀川町誌』犀川町
- 42 佐賀県教育庁社会教育課 1964『佐賀県の遺跡』佐賀県文化財調査報告書第13集 佐賀県教育委員会
- 43 佐賀県史編さん委員会 1968『佐賀県史』上巻 佐賀県
- 44 坂田和弘編 1991『灰塚古墳』熊本県文化財調査報告第114集 熊本県教育委員会
- 45 坂本経堯 1972「6 北園鬼塚古墳」『不知火町史』宇土郡不知火町
- 46 佐々木隆彦編 2013『奴山正園古墳』福津市文化財調査報告書第6集 福津市教育委員会
- 47 佐田茂・伊崎俊秋編 1983『立山山古墳群 福岡県八女市所在立山山古墳群の発掘調査報告』八女市文化財調査報告書第10集 八女市教育委員会
- 48 佐田茂編 1984『セストノ古墳』田川市文化財調査報告書第6集 田川市教育委員会
- 49 嶋田光一編 1989『辻古墳』飯塚市文化財調査報告書第11集 飯塚市教育委員会
- 50 島津義昭 1982「阿蘇の古墳」『えとのす第19号』新日本教育図書
- 51 清水宗昭編 1980「大野原台地の主要古墳」『大野原の遺跡』大野町教育委員会
- 52 下村智ほか 2005「薬師堂山古墳」『平成16年度（2004年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会
- 53 新熊本市史編纂委員会編 1996「4 古墳時代」『新熊本市史 史料編第一巻 考古資料』熊本市
- 54 新福深編 2009『塚崎古墳群』肝付町埋蔵文化財発掘調査報告書（11）鹿児島県肝付町教育委員会
- 55 末永弥義編 2001『豊津町内遺跡等分布地図』豊津町文化財調査報告書第25集 豊津町教育委員会
- 56 杉井健・山元瞭平 2019「阿蘇市上御倉古墳・下御倉古墳の測量調査報告」『古墳時代阿蘇ルートの研究—阿蘇地域に築かれた古墳に着目して—』2014年度～2017年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書 熊本大学文学部
- 57 勢田廣行 1992『別当塚古墳群調査報告書』荒尾市文化財調査報告書第8集 荒尾市教育委員会
- 58 第9回九州前方後円墳研究会実行委員会 2006『前期古墳の再検討』第9回九州前方後円墳研究会大分大会発表要旨・資料集 九州前方後円墳研究会
- 59 第10回九州前方後円墳研究会実行委員会 2007『九州島における中期古墳の再検討』第10回九州前方後円墳研究会宮崎大会資料集 九州前方後円墳研究会
- 60 第11回九州前方後円墳研究会実行委員会 2008『後期古墳の再検討』第11回九州前方後円墳研究会佐賀大会資料集 九州前方後円墳研究会

- 61 第12回九州前方後円墳研究会実行委員会 2009『終末期古墳の再検討』第12回九州前方後円墳研究会宮崎大会資料集 九州前方後円墳研究会
- 62 第13回九州前方後円墳研究会実行委員会 2010『九州島における首長墓系譜の再検討』第13回九州前方後円墳研究会鹿児島大会資料集 九州前方後円墳研究会
- 63 高野和人 1976『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』下巻 佐賀県教育委員会
- 64 立石雅文編 1995『史跡 御塚・権現塚古墳 保存修理事業報告書』久留米市文化財調査報告書第101集 久留米市教育委員会
- 65 田中茂編 1990『宮崎・鹿児島県』『古代学研究』第123号 古代学研究會
- 66 田中聡一 2005『笹塚古墳』老岐市文化財調査報告書第5集 老岐市教育委員会
- 67 田中裕介 1992『豊後』『前方後円墳集成』九州編 山川出版社
- 68 田中裕介・宮内克己編 1995『大在古墳』『大在古墳・浜遺跡第2地点』大分県教育委員会
- 69 田中裕介編 1998『大分県的前方後円墳 三重・西国東地区編』大分県文化財調査報告書第100集 大分県教育委員会
- 70 築城町誌編纂委員会 2006『古墳時代』『築城町誌』築城町
- 71 富田紘一編 1986『頂塚古墳発掘調査報告書』鹿本町文化財調査研究報告第1集 鹿本町教育委員会
- 72 豊崎晃一・清田純一編 1988『2. 石之室古墳の調査』『塚原古墳群発掘調査報告書』城南町文化財調査報告第6集 熊本県城南町教育委員会
- 73 豊津町史編纂委員会 1997『彦徳甲塚古墳』『豊津町史』豊津町
- 74 中島直幸編 1987『双水柴山遺跡』唐津市文化財調査報告第20集 唐津市教育委員会
- 75 中原幹彦 1996『慈恩寺経塚古墳Ⅲ』植木町文化財調査報告第5集 植木町教育委員会
- 76 中川裕二編 1998『小塚古墳』天水町文化財調査報告第1集 天水町教育委員会
- 77 長津宗重 1992『日向』『前方後円墳集成』九州編 山川出版社
- 78 長嶺正秀 1999『豊前国における首長墓の変遷と諸問題 - 岩屋古墳群の歴史的位置 - 』『岩屋古墳群』荇田町文化財調査報告書第31集 荇田町教育委員会
- 79 長嶺正秀編 2000『荇田町の文化遺産』荇田町文化財調査報告書第34集 荇田町教育委員会
- 80 中村幸史郎編 1989『銭亀塚古墳ほか』山鹿市立博物館調査報告書第9集 山鹿市教育委員会
- 81 中村修身編 1987『福岡県主要古墳地名表』福岡県首長墓研究会
- 82 西園勝彦ほか編 2019『見婦遺跡』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(23) 鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
- 83 二宮満夫・東憲章・和田理啓 2007『西都原173号墳・西都原4号地下式横穴墓・西都原111号墳』特別史跡 西都原古墳群発掘調査報告書第6集 宮崎県教育委員会
- 84 萩原房男・渡辺正気 1975『潜塚古墳』大牟田市教育委員会
- 85 橋口剛士 2019『嘉島町井寺古墳復旧調査の成果と課題』『平成28年熊本地震復興に係わる文化財・埋蔵文化財調査の成果報告会資料』日本考古学協会 pp.8-11
- 86 橋本英俊・大木努 2008『西都原169号墳(遺構編)・西都原170号墳(遺構編)』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第7集 宮崎県教育委員会
- 87 秦広之編 2016『実相寺古墳群』別府市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集 別府市教育委員会
- 88 花田勝彦 2010『宗像地域の古代史と遺跡概説』『むなかた電子博物館紀要』第2号 (<https://munahaku.jp/wp-content/themes/munahaku/img/kiyou/vol02/pdf/46-98.pdf>)
- 89 原口長之 1985『馬塚古墳』『山鹿市史』上巻 山鹿市
- 90 原口長之 1985『金屋塚古墳』『山鹿市史』上巻 山鹿市
- 91 久山高史編 1994『牛原原田遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第43集 鳥栖市教育委員会
- 92 飛野博文・末永浩一 1999『史跡穴ヶ葉山古墳』大平村文化財調査報告書第10集 大平村教育委員会
- 93 平嶋文博編 2001『国指定史跡 仙道古墳』三輪町文化財調査報告書第10集 三輪町教育委員会
- 94 福岡市教育委員会・九州大学考古学研究室 1989『福岡市・今里不動古墳の調査』『九州考古学』第63号 九州考古学会
- 95 福岡市の文化財 文化材情報検索「今里不動古墳」(<https://munahaku.jp/wp-content/themes/munahaku/img/kiyou/vol02/pdf/46-98.pdf>)
- 96 豊後大野市教育委員会編 2011『②古墳時代』『発見!発掘!郷土の歴史 弥生時代・古墳時代編』豊後大野市教育委員会
- 97 松尾宏編 2000『朝倉町の古墳と埴輪』朝倉町文化財調査報告書第9集 朝倉町教育委員会
- 98 松尾則男 2004『おおいの古墳と神社』東九企画
- 99 水ノ江和同・重藤輝行・尾園晃・岸本圭・宮代栄一 1997『福岡県稲築町次郎太郎古墳群の研究』『九州考古学』第72号 九州考古学会
- 100 宮崎県史編さん委員会 1993『宮崎県史 資料編 考古2』宮崎県
- 101 宮崎県史編さん委員会 1997『宮崎県史 通史編 原始・古代1』宮崎県
- 102 宮崎貴夫「老岐」『前方後円墳集成』九州編 山川出版社
- 103 宮崎貴夫「対馬」『前方後円墳集成』九州編 山川出版社
- 104 村上久和 1992『豊前』『前方後円墳集成』九州編 山川出版社
- 105 毛利哲久編 2001『忠隈古墳群』穂波町文化財報告書第13集 穂波町教育委員会
- 106 諸岡郁編 2018『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書8』豊後大野市教育委員会
- 107 安武千里編 1998『勝浦北部丘陵遺跡群』津屋崎町文化財調査報告書第13集 津屋崎町教育委員会
- 108 柳沢一男 1990『福岡県の円墳』『古代学研究』第123号 古代学研究會
- 109 柳沢一男・吉留秀敏 1992『九州地方の概観』『前方後円墳集成』九州編 山川出版社
- 110 柳沢一男 1992『筑前』『前方後円墳集成』九州編 山川出版社
- 111 山口優 2005『兵瀬古墳』老岐市文化財調査報告書第4集 老岐市教育委員会
- 112 山田克樹編 1997『芦屋町遺跡詳細分布調査報告書』芦屋町文化財調査報告書第9集 福岡県芦屋町教育委員会
- 113 山中英彦編 2005『稲童古墳群』行橋市文化財調査報告書第32集 行橋市教育委員会
- 114 吉田和彦・若杉竜太 1999『大分県』『九州における横穴式石室の導入と展開(第Ⅱ分冊)』九州前方後円墳研究会
- 115 與嶺友紀也・入江由真編 2015『平原古墳群調査報告3』『考古学研究室報告』第50集 熊本大学考古学研究室
- 116『鏝塚古墳』鞍手町歴史民俗博物館 (<http://kurate-museum.com/index.php>)
- 117 若杉あずさ編 1997『考古学研究室報告』第33集 熊本大学文学部考古学研究室
- 118 渡辺正気・横田義章・副島邦弘編 1985『新延大塚古墳』鞍手町文化財調査報告書第3集 鞍手町教育委員会

二 調査経過

1. 過去の調査（第1～5次調査）

第1次調査および小倉林道石棺・火葬墓の発見 平原古墳群は、1981年、県道213号内牧坂梨線拡幅工事の際に発見された。このとき熊本県教育委員会によって1号墳が発掘調査され、主体部は安山岩製の箱式石棺であることが確認された。また、棺内から鉄剣1点と堅櫛1点、人骨2体分が、棺外からは土師器片と赤色顔料付着の石材が出土した。1982・1983年には、熊本短期大学（現熊本学園大学）文化財研究会によって2～4号墳（この4号墳は現在の6号墳に当たる）の測量調査が行われた（文化財研究会1983・1984）。これら1981～1983年の一連の調査を第1次調査と呼称する。なお、1号墳調査の報告は、2015年、熊本大学によってなされたが、そのなかで1号墳は墳丘を有さない可能性が指摘された（與嶺・入江編2015）。また、1号墳の石棺は、調査後、旧阿蘇町教育委員会の中庭に移築されていたが、2018年7月に解体され、いまは旧役犬原小学校に保管されている。

第1次調査後、1989年には、6・7号墳からやや北西に離れた林道の西脇において箱式石棺が不時発見された（^{おくら}小倉林道石棺）（阿蘇町教委1989）。また、2006年には、6号墳南側の樹木運搬用溝の北側法面で、8世紀後半の火葬墓が検出された。このとき、火葬墓北側の円墳を6号墳（熊本短期大学測量時は4号墳）、その西側の小円墳を7号墳として測量図が作成された（緒方編2011）。

第2～5次調査 熊本大学文学部考古学研究室では、2001年度から、熊本県地域の古墳動向の解明を調査・研究活動のテーマの1つとし、県内各地の古墳の調査を継続的に行ってきた。九州本島の東西南北を結ぶルートを中心に位置する阿蘇地域もそうした調査・研究対象の1つである。

さて、熊本大学による平原古墳群の調査は、2011年以来これまでに第2～5次の4度実施している。まず、第2次調査（安田編2013）では、2011年10月14・16・23日、11月1～7日、2012年4月29・30日の計12日間を使って、古墳群の南尾根グループに所在する6・7号墳の測量調査を行った。このときの測量はトータルステーションと電子平板を用いた変化点測量法によった。

第3次調査（安田編2013）では、6号墳を対象に、墳丘規模・構造の解明を目的として発掘調査を行った。調査期間は、2012年8月19日から9月15日までの計28日間である。調査区は、6号墳の東・北・西の3カ所に設け、それぞれ東1・北1・西1トレンチと呼称した。調査の結果、東1・北1トレンチでは、段築1段目の葺石が良好に遺存していること、また墳端には平坦面が形成されるが、周溝となるような掘り込みは存在しないことを確認した。他方、西1トレンチでは、段築1段目のほかに2段目葺石の基底石も検出し、段築テラス面には小礫が敷かれていることを確認した。そして、6号墳は2段築成の円墳で、東西約31mの規模と推測した。なお、壺形埴輪と土師器が出土したが、前者は集成編年4期頃、後者は6期前後と判断され、古墳の時期的位置づけに課題を残した。

第4次調査（留野編2014）も6号墳を対象として、墳端位置の確定、段築・墳頂平坦面の構造解明を目的に発掘調査を実施した。調査期間は、2013年8月18日から9月14日までの計28日間である。調査区は墳丘の北・西・南の3カ所に設定し、それぞれ北1・西1・南1トレンチと称したが、うち北1・西1トレンチは第3次調査時のトレンチを墳頂方向に拡張したものである。調査の結果、北1トレンチでは段築1段目の葺石と同様、2段目の葺石も良好に遺存していることを確認した。また、北1・西1トレンチでは墳頂平坦面の位置を、他方、南1トレンチでは墳端の位置を確認した。南1トレンチでは、アカホヤ層まで整地した後に若干の盛土を行い墳端平坦面を形成していることも明ら

かとなった。こうした成果から、6号墳は東西約31m、南北約30mの規模であると推測した。

第5次調査（與嶺・入江編2015）では、6号墳の段築・墳頂平坦面・埋葬施設の構造の解明を目的とした発掘調査と、2・3号墳を含めた南尾根全体の測量調査を実施した。調査期間は、2014年8月18日から9月12日までの計26日間である。6号墳の発掘調査では、調査区を墳丘の東斜面と墳頂に設け、それぞれ東1トレンチ・墳頂トレンチと呼称したが、東1トレンチは第3次調査時のトレンチを墳頂方向に拡張したものである。調査の結果、東1トレンチでは、良好に遺存する段築2段目の葺石および段築テラス面を検出し、これまでの成果と合わせて墳丘北側斜面の構造がほぼ明らかとなった。一方、墳頂トレンチでは、墳頂面に礫敷きが施されていることを確認し、また盗掘坑らしき掘り込みラインを検出したが、樹木に遮られたこともあり、肝心の埋葬施設を確認することはできなかった。測量調査は、第2次調査と同じく電子平板を用いて行った。測量の結果、3号墳は方墳となる可能性もあることが指摘された。また、2・3号墳と6・7号墳とのあいだに古墳が存在しないことが確認され、遺跡地図（緒方編2000）に示された4・5号墳の不在が確定した。なお、長目塚古墳出土壺形埴輪の評価（竹中2014）を勘案して6号墳出土壺形埴輪を再検討したところ、集成編年5～6期に位置づけられると修正され、土師器の時期との齟齬が解消された。また、3号墳は、採集された須恵器甕片からTK23型式段階頃に位置付けられる可能性が指摘された。（杉井）

2. 今年度の調査（第6次調査）

第5次調査（2014年度）後、2018年度までの4年間、熊本大学の夏のメイン実習調査は長崎県対馬市の越高遺跡等を対象に行われた。その間、平原古墳群の発掘調査は中断したが、短期間での実習実施は可能であったことから、上御倉古墳など古墳の測量調査を行った。2019年度の今夏、平原古墳群の発掘調査を5年ぶりに再開した（第6次調査）。内容は、6号墳墳丘南側の段築構造、および3号墳墳丘構造の解明を目的とした6号墳・3号墳の発掘調査、さらに北尾根グループに所在する8号墳の測量調査である。調査期間は、2019年8月21日から9月13日までの計24日間である。

6号墳の発掘調査では、墳丘南斜面の上半部に1カ所の調査区を設けた。樹木があり第4次調査時の南1トレンチを墳頂方向にそのまま拡張できなかったことから、南1トレンチにおよそ平行する位置に設定し、名称を南2トレンチとした。調査の結果、段築2段目の葺石と段築テラス面の敷石がすべて失われていることが判明した。しかし、1段目の葺石はその上端部のみの検出にとどまったものの良好に遺存していたため、段築テラス面の本来の位置をおおよそ推測することができた。ただし、以前の南1トレンチでは1段目葺石上方の残存状況が悪いことが確認されており、その点が今回の南2トレンチでの様相とは異なっている。今後の検証が必要である。

3号墳の発掘調査では、墳丘西側に1カ所の調査区を設けた。西トレンチと呼称する。当初はさらに数カ所の調査区を設定する予定であったが、降雨続きの天候のため思うように作業が進まず、調査期間の関係から調査区は1カ所のみにとどめた。調査では慎重に掘り進めたが、葺石と判断できるような石材は検出されなかった。3号墳は葺石を有さないと思われる。また、墳丘盛土と地山、流出土がいずれも類似した土質の黒色土であったため、相互の区別がきわめて困難であった。そのため、現段階でもっとも合理的に説明できるとと思われる解釈にもとづいて分層を行ったが、その分層が正鵠を射ているのかどうかについては十分な確証を得ていない。そのため、本報告で示す墳丘面ラインは一案に過ぎず、その正否は、今後の新たな調査区や墳丘に影響のない地点での坪掘り等による土層検討を通じて注意深く検証する必要がある。また、トレンチの西側で安山岩片や土師器が出土したが、そ

二 調査経過

第3表 平原古墳群測量基準点の現場座標（1）

基準点名	X座標 (m)	Y座標 (m)	標高 (m)	備 考
H1	0.000	0.000	529.532	消失
H1-1	-1.781	0.000	529.314	H1の移設、6号墳墳頂
H2	4.905	0.000	529.605	6号墳墳頂
H3	28.342	0.000	527.395	7号墳墳頂
H4	-16.739	0.000	523.664	
H5	3.852	-7.374	527.635	
H6	-1.618	-10.344	526.638	
H7	-9.068	-5.066	526.103	
H8	-5.944	5.548	526.691	
H9	1.667	9.088	527.072	
H10	9.955	6.007	527.533	
H11	15.509	11.711	524.948	
H12	36.550	-0.238	526.542	
H13	25.017	-10.792	525.472	消失
H14	15.036	-13.514	524.848	
H15	-13.344	-10.655	523.812	
H16	-8.294	-15.279	523.991	
H17	-5.797	14.059	524.312	
H18	-1.946	-17.397	524.036	
H19	4.395	-17.816	523.974	
H20	-12.652	7.721	523.953	
H21	0.800	14.968	524.618	
H22	16.000	0.762	526.516	
H23	-21.667	-5.206	522.361	
H24	-31.647	-3.588	520.336	
H25	-29.146	-13.091	519.720	
H26	-40.964	-7.516	518.012	
H27	-45.729	-7.259	517.523	
H28	-36.482	-14.920	518.213	
H29	-51.322	-7.077	515.958	
H30	-56.631	-10.731	514.058	
H31	-61.597	-5.458	513.393	
H32	-87.000	1.904	512.938	3号墳墳頂
H33	-76.534	2.161	511.825	
H34	-86.749	-8.551	510.457	
H35	-87.140	7.545	512.114	
H36	-103.221	1.492	509.377	
H37	-120.295	1.082	512.938	2号墳墳頂
H38	-114.098	1.235	512.584	
H39	-120.168	-3.972	512.223	
H40	-120.401	5.348	512.435	
H41	-124.869	0.967	512.585	
H42	-79.027	11.771	510.547	
H43	-95.740	14.367	509.231	
H44	-94.396	7.086	511.255	
H45	-97.072	-8.408	509.857	
H46	-107.885	12.778	508.700	
H47	-104.955	-10.008	508.219	
H48	-115.280	-8.100	510.109	
H49	-114.114	-15.676	506.986	
H50	-120.804	-15.591	506.516	
H51	-129.104	-10.438	507.658	
H52	-134.204	-5.227	507.998	
H53	-132.786	0.941	509.422	
H54	-127.539	5.005	511.094	
H55	-124.265	9.619	509.652	
H56	-119.782	9.678	510.319	
H57	-114.980	13.200	508.779	
H58	-45.935	6.217	515.061	
H59	-94.929	-17.537	507.238	
H60	-108.913	-30.867	501.789	
H61	-114.857	-38.981	499.562	
H62	-47.530	20.342	510.939	
H63	23.510	29.344	517.611	
H64	0.851	61.675	502.839	
H65	-51.226	139.063	517.274	
H66	17.470	15.951	未計測	
H67	29.726	48.681	未計測	
H68	-3.627	78.563	未計測	
H69	-60.361	152.091	519.231	
H70	-68.729	169.340	527.262	
H71	-71.502	176.010	529.576	
H72	-73.485	181.323	529.666	8号墳墳頂
H73	-65.061	185.321	529.599	
H74	-75.325	185.265	528.869	
H75	-77.992	181.304	528.699	
H76	-64.332	173.869	528.340	
H77	-59.946	184.841	528.106	
H78	-53.186	180.533	525.899	
H79	-45.287	187.449	523.840	
H80	-76.010	190.563	526.328	
H81	-85.566	194.622	522.793	
H82	-67.930	203.585	521.287	

第4表 平原古墳群測量基準点の国土座標（1）

基準点名	X座標 (m)	Y座標 (m)	標高 (m)	備 考
H1	-1902.473	7860.136	529.532	消失
H1-1	-1903.134	7861.790	529.314	H1の移設、6号墳墳頂
H2	-1900.652	7855.582	529.605	6号墳墳頂
H3	-1891.951	7833.822	527.395	7号墳墳頂
H4	-1908.687	7875.677	523.664	
H5	-1907.889	7853.822	527.635	
H6	-1912.678	7857.798	526.638	
H7	-1910.543	7866.674	526.103	
H8	-1899.529	7867.714	526.691	
H9	-1893.416	7861.962	527.072	
H10	-1893.200	7853.123	527.533	
H11	-1885.842	7850.084	524.948	
H12	-1889.125	7826.113	526.542	
H13	-1903.205	7832.903	525.472	消失
H14	-1909.438	7841.159	524.848	
H15	-1917.320	7868.570	523.812	
H16	-1919.738	7862.164	523.991	
H17	-1891.572	7870.738	524.312	
H18	-1919.348	7855.484	524.036	
H19	-1917.383	7849.441	523.974	
H20	-1900.002	7874.749	523.953	
H21	-1888.279	7864.950	524.618	
H22	-1895.826	7845.564	526.516	
H23	-1915.350	7878.320	522.361	
H24	-1917.553	7888.186	520.336	
H25	-1925.448	7882.336	519.720	
H26	-1924.659	7895.379	518.012	
H27	-1926.190	7899.898	517.523	
H28	-1929.869	7888.469	518.213	
H29	-1928.097	7905.158	515.958	
H30	-1933.460	7908.731	514.058	
H31	-1930.408	7915.299	513.393	
H32	-1933.004	7941.618	512.938	3号墳墳頂
H33	-1928.880	7931.996	511.825	
H34	-1942.618	7937.503	510.457	
H35	-1927.819	7943.842	512.114	
H36	-1939.409	7956.525	509.377	
H37	-1946.128	7972.225	512.938	2号墳墳頂
H38	-1943.685	7966.528	512.584	
H39	-1950.773	7970.231	512.223	
H40	-1942.207	7973.907	512.435	
H41	-1947.933	7976.429	512.585	
H42	-1920.883	7937.878	510.547	
H43	-1924.678	7954.359	509.231	
H44	-1930.939	7950.408	511.255	
H45	-1946.317	7947.141	509.857	
H46	-1930.662	7965.045	508.700	
H47	-1950.729	7953.866	508.219	
H48	-1952.791	7964.160	510.109	
H49	-1959.392	7960.265	506.986	
H50	-1961.797	7966.508	506.516	
H51	-1960.094	7976.127	507.658	
H52	-1957.149	7982.797	507.998	
H53	-1950.896	7983.770	509.422	
H54	-1945.175	7980.407	511.094	
H55	-1939.676	7979.080	509.652	
H56	-1937.957	7974.940	510.319	
H57	-1932.904	7971.789	508.779	
H58	-1913.754	7905.092	515.061	
H59	-1953.998	7941.762	507.238	
H60	-1971.565	7949.796	501.789	
H61	-1981.306	7952.303	499.562	
H62	-1901.232	7911.817	510.939	
H63	-1866.501	7849.202	517.611	
H64	-1844.895	7882.243	502.839	
H65	-1792.378	7959.324	517.274	
H66	-1881.178	7849.838	未計測	
H67	-1846.240	7850.610	未計測	
H68	-1830.878	7892.670	未計測	
H69	-1783.674	7972.642	519.231	
H70	-1770.766	7986.815	527.262	
H71	-1765.602	7991.866	529.576	
H72	-1761.406	7995.679	529.666	8号墳墳頂
H73	-1754.566	7989.342	529.599	
H74	-1758.429	7998.851	528.869	
H75	-1763.097	7999.857	528.699	
H76	-1764.928	7984.414	528.340	
H77	-1753.113	7984.415	528.106	
H78	-1754.603	7976.539	525.899	
H79	-1745.249	7971.773	523.840	
H80	-1753.764	8001.454	526.328	
H81	-1753.543	8011.833	522.793	
H82	-1738.674	7998.786	521.287	

第5表 平原古墳群測量基準点の現場座標（2）

基準点名	X座標 (m)	Y座標 (m)	標高 (m)	備 考
H83	-62.674	211.184	518.297	
H84	-82.059	214.701	517.324	
H85	-89.792	184.275	522.923	
H86	-94.353	177.523	520.761	
H87	-102.331	182.537	517.895	
H88	-93.979	168.250	519.571	
H89	-86.645	156.594	518.419	
H90	-72.681	146.931	517.835	
H91	-62.368	167.096	525.787	
H92	-58.651	161.785	522.992	
H93	-75.614	172.963	527.925	
H94	-77.300	159.172	521.531	
H95	-90.703	198.610	520.353	
H96	-51.928	160.037	520.932	
H97	-45.178	161.183	521.576	
H98	-55.345	201.366	520.922	
H99	-75.986	141.642	515.369	
H100	-100.727	163.066	515.484	
H101	-109.401	189.353	515.794	
H102	-92.740	202.928	518.565	
E1	-16.881	0.515	523.631	6号、東1Tr. 下方
E2	-10.376	0.521	525.617	消失
E3	-1.877	0.542	529.211	6号、東1Tr. 墳頂付近
N1	0.091	16.346	524.365	6号、北1Tr. 下方
N2	0.703	10.370	526.414	消失
N3	1.430	3.415	529.453	6号、北1Tr. 墳頂付近
W1	19.849	1.358	526.055	6号、西1Tr. 下方
W2	12.847	1.149	527.817	消失
W3	5.845	0.914	529.629	6号、西1Tr. 墳頂付近
W4	7.348	0.966	529.440	6号、西1Tr. 墳頂付近
S1	5.867	-19.844	523.327	6号、南1Tr. 下方
S2	4.109	-11.018	526.453	6号、南1Tr. 上方
S3	5.509	-11.799	未計測	6号、南2Tr. 下方
S4	3.367	-1.057	未計測	6号、南2Tr. 墳頂付近
T1	7.748	1.661	529.320	6号、墳頂Tr. 西側
T2	-1.387	-0.942	529.343	6号、墳頂Tr. 東側
3W1	-75.711	2.655	511.748	3号、西Tr. 下方
3W2	-84.047	2.521	512.885	3号、西Tr. 上方

第6表 平原古墳群測量基準点の国土座標（2）

基準点名	X座標 (m)	Y座標 (m)	標高 (m)	備 考
H83	-1729.668	7996.728	518.297	
H84	-1733.599	8016.031	517.324	
H85	-1764.719	8011.915	522.923	
H86	-1772.681	8013.643	520.761	
H87	-1770.988	8022.912	517.895	
H88	-1781.152	8009.853	519.571	
H89	-1789.251	7998.717	518.419	
H90	-1793.038	7982.165	517.835	
H91	-1770.487	7980.076	525.787	
H92	-1774.039	7974.653	522.992	
H93	-1769.958	7994.552	527.925	
H94	-1783.388	7990.998	521.531	
H95	-1751.748	8018.083	520.353	
H96	-1773.166	7967.762	520.932	
H97	-1769.596	7961.921	521.576	
H98	-1736.062	7986.278	520.922	
H99	-1799.176	7983.270	515.369	
H100	-1788.470	8014.194	515.484	
H101	-1767.284	8032.006	515.794	
H102	-1748.495	8021.577	518.565	
E1	-1908.262	7876.000	523.631	6号、東1Tr. 下方
E2	-1905.841	7869.963	525.617	消失
E3	-1902.667	7862.080	529.211	6号、東1Tr. 墳頂付近
N1	-1887.263	7866.120	524.365	6号、北1Tr. 下方
N2	-1892.584	7863.333	526.414	消失
N3	-1898.771	7860.076	529.453	6号、北1Tr. 墳頂付近
W1	-1893.843	7842.211	526.055	6号、西1Tr. 下方
W2	-1896.637	7848.635	527.817	消失
W3	-1899.454	7855.049	529.629	6号、西1Tr. 墳頂付近
W4	-1898.848	7853.672	529.440	6号、西1Tr. 墳頂付近
S1	-1918.719	7847.322	523.327	6号、南1Tr. 下方
S2	-1911.177	7852.231	526.453	6号、南1Tr. 上方
S3	-1911.383	7850.641	未計測	6号、南2Tr. 下方
S4	-1902.204	7856.618	未計測	6号、南2Tr. 墳頂付近
T1	-1898.054	7853.559	529.320	6号、墳頂Tr. 西側
T2	-1903.863	7861.074	529.343	6号、墳頂Tr. 東側
3W1	-1928.116	7931.415	511.748	3号、西Tr. 下方
3W2	-1931.335	7939.105	512.885	3号、西Tr. 上方

れらは流出土中に包含されると推測されるため、その出土レベルより下位の土層についてもまだ掘り下げることができる可能性がある。しかし、調査期間の関係上、今回その部分の掘り下げまでには至っていない。この点も今後に残された課題である。以上のように、3号墳については、調査区が1カ所にとどまったこと、土層解釈に不明な点を残したこと、流出土の除去が不完全であると思われることなどの理由により、墳丘構造の詳細を明らかにするまでには至らなかった。

8号墳の測量調査は、レベルで等高線を探し、その座標をトータルステーションで計測して方眼紙上に描くという方法によった。南尾根グループの測量で用いた電子平板は使わなかった。その理由は、電子平板による測量では実際に現地で等高線を探す作業を行わないため、学生の地形を読む力の向上には有効でないと判断したためである。さて測量は、降雨続きであったこと、灌木の伐採に難渋したこと、古墳の規模が予想以上に大きかったことなどから、なかなか順調には進まなかったが、途中トータルステーションを2台投入するなどして、何とか墳端と思われる範囲までの等高線を描くことができた。その結果、8号墳は直径60mを超える肥後地域最大級の円墳である可能性が考えられた。なお、8号墳の西側にはまだ小円墳が3基存在するが、それらの測量は今後に残された課題である。

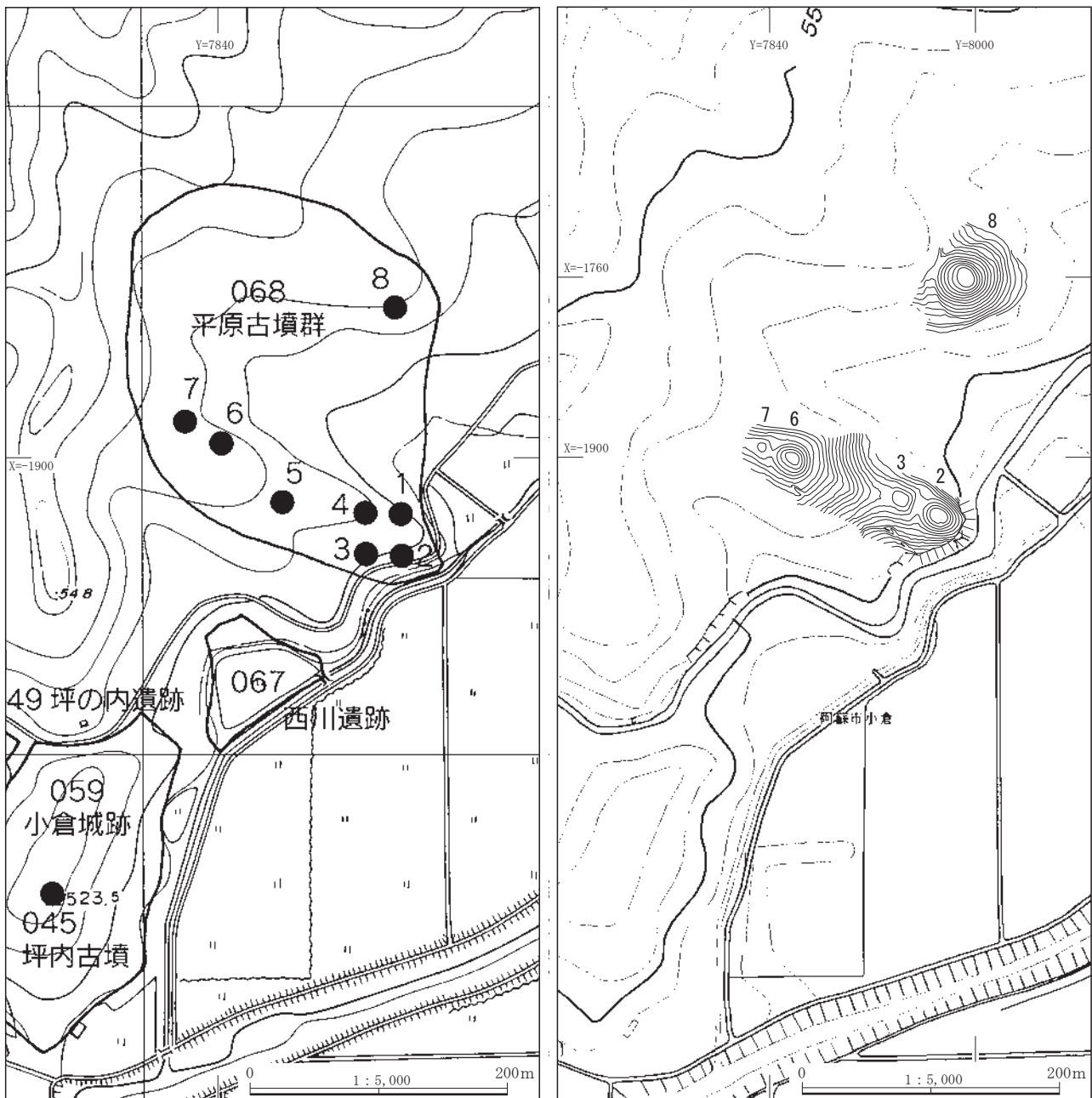
天候に恵まれなかったことも影響したが、古墳の調査に不慣れな学生が多かった点や調査対象の古墳どうしが離れていた点などを考えると、3基の古墳の調査を同時並行で行った点に若干の無理があったことは否定できない。とはいえ、何とか予定の期間内に調査を終えることができたのは、地元住民の方々や自治体からの惜しみないご援助があったからである。9月7日には現地説明会を行い、参加者は7名と少なかったが、学生のつたない説明にも熱心に耳を傾けて下さる姿は、我々に地域における文化財の重要性を再認識させた。さまざまな反省点を踏まえつつ、次年度以降にも調査を継続し、阿蘇地域における平原古墳群の意義を明らかにしていきたいと思う。（杉井）

三 平原古墳群における古墳の分布

1. 平原古墳群の位置 (第1図)

平原古墳群は、熊本県阿蘇市山田字平原に所在する。そこは、阿蘇谷北縁を画す外輪山から南へ大きく突出する遠見ヶ鼻（大観峰）と象ヶ鼻のほぼ中央にあたり、短く南へのびる低い尾根地形をなす。

本古墳群は、1981年に発見され、これまでに幾度か古墳分布図が示されてきた（清田編 1982、熊本県教委 1998、緒方編 2000）。しかし、それらに提示された古墳分布や古墳番号の数え方にはいくつかの相違が見られたために混乱が生じている。よって以下では第2～5次調査の成果に今年度の測量調査の成果を加え、改めて本古墳群の古墳分布について整理しておきたい。（小堀）



1. 『阿蘇町遺跡地図』(2000年)の平原古墳群古墳分布

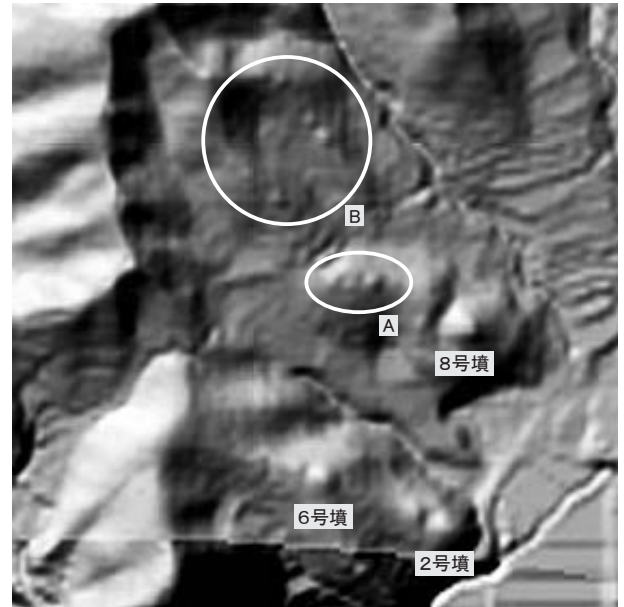
2. 平原古墳群2・3・6・7・8号墳の分布

第2図 平原古墳群における古墳分布図の比較

2. 古墳分布の様相

古墳の分布する2つの尾根 第2図-1（以下、地図1と表記）は『阿蘇町遺跡地図』（緒方編2000）で示された平原古墳群の分布、第2図-2（以下、地図2と表記）はこれまでに作成した測量図（第3図、第13図）の等高線間隔を1mとし、国土地理院ホームページ電子国土Web（<http://www.gsi.go.jp/>）の地図に挿入したものである。

まずは平原古墳群全体に関してであるが、古墳は南尾根と北尾根の2カ所に分かれて分布する（地図1、地図2）。これをそれぞれ南尾根グループ、北尾根グループとする。南尾根・北尾根の南側には県道213号内牧坂梨線が東西に通っており、近年は県道から分岐した林道が丘陵の一部を切り通すように南尾根の西側に建設されている。2つの尾根を隔てる谷部には小さな沢が流れており、そこでは第五章で述べる6号墳葺石と同種の石材を採取することが可能である。



第4図 平原古墳群周辺の陰影起伏図

南尾根グループ（第3図） 南尾根グループは北西から南東にのびる尾根の稜線に沿って古墳が分布している。そこには現在、明確な墳丘を有する古墳が4基存在する。それは2・3・6・7号墳であり、2・3号墳および6・7号墳がそれぞれ大小1つのまとまりをなすように近接して分布する（地図2）。墳丘規模は6号墳、2号墳、3号墳、7号墳の順に大きいことがわかっている。3号墳は方墳の可能性もあるが、そのほかは円墳である。3号墳の西側墳端と6号墳の東側墳端の墳端間距離は約65mであり、このあいだに古墳は存在しない。2号墳の南東には1号墳が存在していたが、1981年に県道213号の道路拡幅工事の際に発見・調査され、その後は完全に失われてしまった。1号墳は墳丘を有さない可能性が高い。1989年には6・7号墳からやや北西に離れた林道の西脇（平原495番地）で箱式石棺（小倉林道石棺）が不時発見され、埋め戻されている（阿蘇町教委1989）。

なお、地図1では2・3号墳と6・7号墳のあいだに4・5号墳が、2号墳の北側に1号墳が示されているが、これらは誤認であることが明らかとなっており（杉井2013・2015）、4・5号は現在、欠番となっている。

以上、南尾根グループは墳丘を有す古墳4基（2・3・6・7号墳）と箱式石棺墓2基（1号墳・小倉林道石棺）で構成されている。

北尾根グループ 北尾根グループも北西から南東に伸びる尾根の稜線に沿って古墳が分布している。尾根の南東端に分布するのが8号墳である（地図1・2）。これより南東に古墳は存在しない。一方で、8号墳から尾根に沿って北西へ進むと小規模な円墳3基が分布している（第4図A）。ただし、尾根を直線的に歩いて確認しただけであるため、これらですべてであるかどうかは確証がなく、今後の調査次第ではさらに古墳が発見される可能性もある。

以上、北尾根グループは少なくとも円墳4基で構成されている。このような様相は、地図1をはじめ、これまでの分布図に示されていない。なお、電子国土Webの陰影起伏図を見れば、北尾根グループよりもさらに北側の尾根上にいくつかの丸い陰影を認めることができる（第4図B）。これらが古墳であるかどうかの確認も今後行う必要がある。（小堀）

四 3号墳の発掘調査

1. 墳丘の現状（第5図、図版1-1）

平原3号墳は南尾根グループに所在し、その住所は熊本県阿蘇市山田字平原485および490番地である。実際の方角とは若干異なるが、便宜上第5図の測量基準点H32（3号墳墳頂）からH33（3号墳墳端）の方向を西として記述する。

3号墳の墳頂最高点は標高512.866mである。墳頂平坦面は512.6m以上において見られ、広さはおよそ東西9.0m、南北6.3mである。墳丘斜面はほぼ一定の傾斜をなし、段築の様子は現状においては判然としない。墳丘斜面は、東側では509.5m、西側では511.8m、南側では510.7mの付近でほぼ傾斜が水平になる。北側では墳丘斜面がそのまま崖へとつながるが、標高509.1m付近でやや緩斜面となっている。傾斜変化点を線で結ぶと、北側と東側では直線を描くのに対し、南側から西側を通って北西側にかけては弧線を描く。西側の墳端と北側の墳端の残存部を延長した直線の交点を方墳の隅角の1つと見た場合、3号墳は東西辺20.1m、南北辺21.3m、高さ1.1～3.8mの方墳であると推測できる。一方南側と西側の等高線は弧を描いていることから、3号墳は円墳である可能性も考えられる。なお、南側から北西側では墳頂から傾斜変化点までの距離が短いことから、墳丘が削平されている可能性も考えられる。墳丘周囲の南東側では、510.0m付近で墳丘斜面からほぼ平坦な面になり、509.6m付近から傾斜が急になる。このことから南東側には幅1.5～2.5mの墳端平坦面の存在が推測できるが、全体においては墳端平坦面を確認することはできない。また、現状の地形においては周溝の存在は確認できない。（河野）

2. トレンチの設定（第6図）

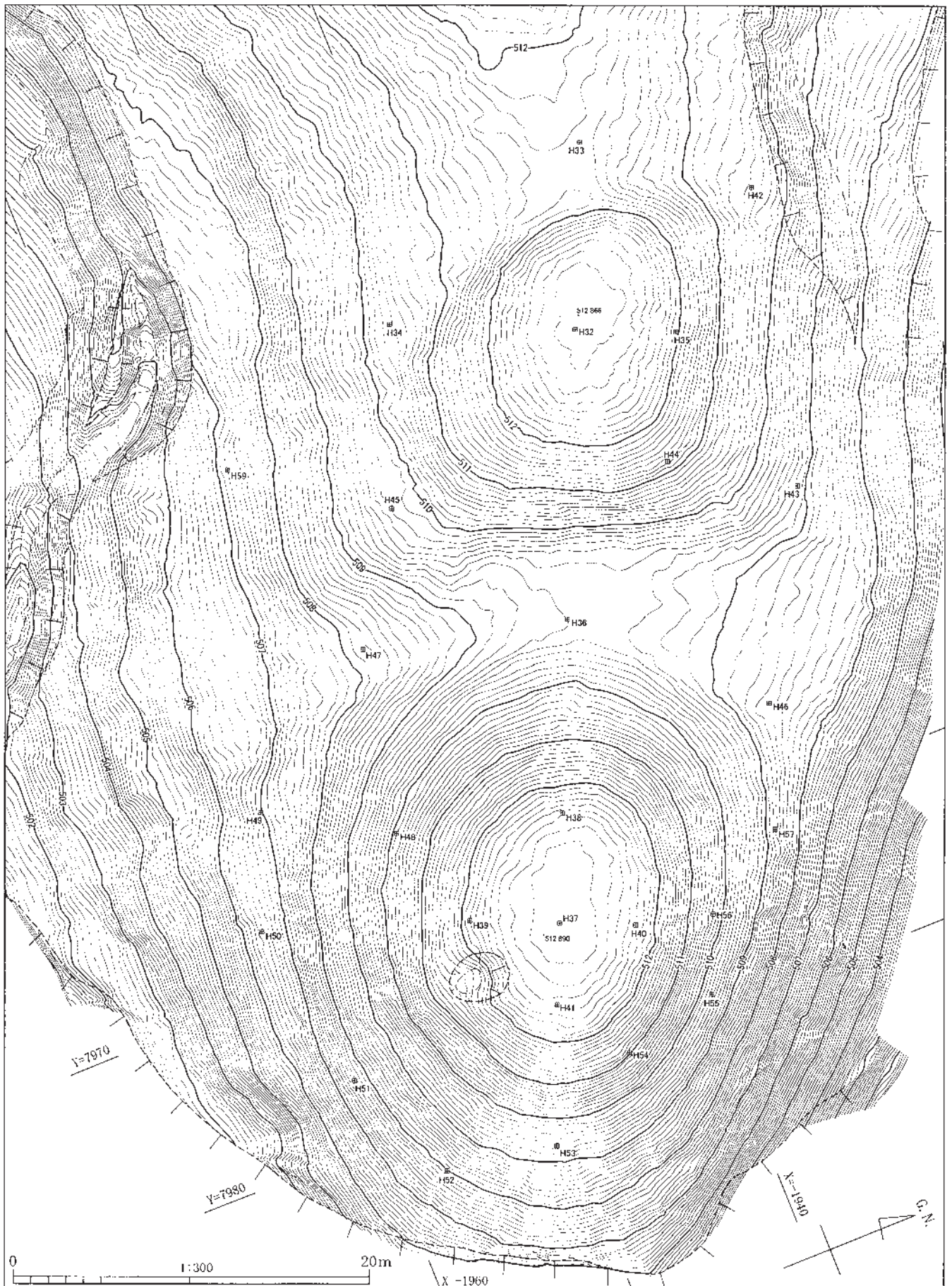
今年度の調査では、墳丘規模・構造の解明を目的とし、墳頂の測量基準点H32と西側のH33のあいだに、幅1m、長さ6mのトレンチを設定した。これを西トレンチと呼称する。当初の予定では墳丘構造の解明にあたって数カ所のトレンチを設定する計画であったが、連日の降雨の影響で作業が予定通りに進まなかったため、調査期間の関係上西トレンチの1カ所にとどめることとなった。（河野）

3. 調査の所見（第7図、図版2・3）

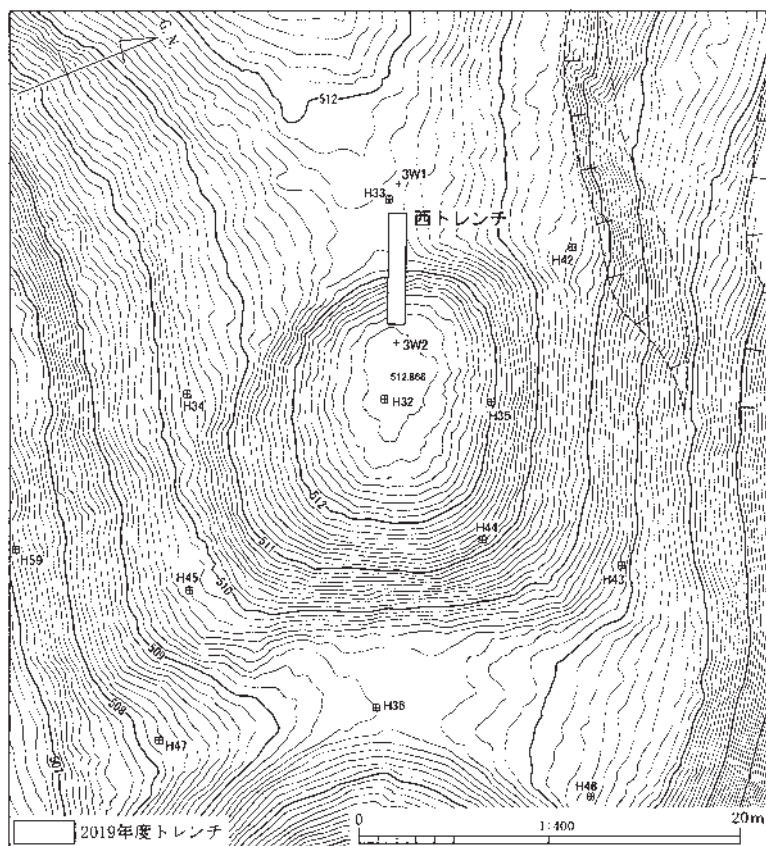
西トレンチは3号墳の墳丘規模・構造の解明を目的として、墳丘西側に設定したトレンチである。規模は幅1m、長さ6mで、トレンチ東端は測量基準点H32より西に約4mの地点に位置する。第二章の調査経過でも述べたように、墳丘盛土と地山、流出土がいずれも類似した土質の黒色土であったため、相互の区別がきわめて困難であった。そのため、現段階でもっとも合理的に説明できると思われる解釈に基づいて分層を行ったが、それが正しいものであるという十分な確証は得られていない。その点を断った上で、西トレンチにおける調査の所見を以下に記述する。

西トレンチでは、転落石と思われる石材を含めて、葺石は出土しなかった。また、上述したように土層の区別が極めて困難であったことから、結果的に墳丘を一部断ち割ることで墳丘面を確認した。土層は、古墳築造に関係するもの（第7・8層）と古墳築造後に堆積したもの（第1～6層）に大きく二分される。

古墳の築造に関係すると判断できる土層は、第7層および第8層である。第7層はトレンチ東小口



第5図 2・3号墳丘測量図(上:3号墳 下:2号墳)

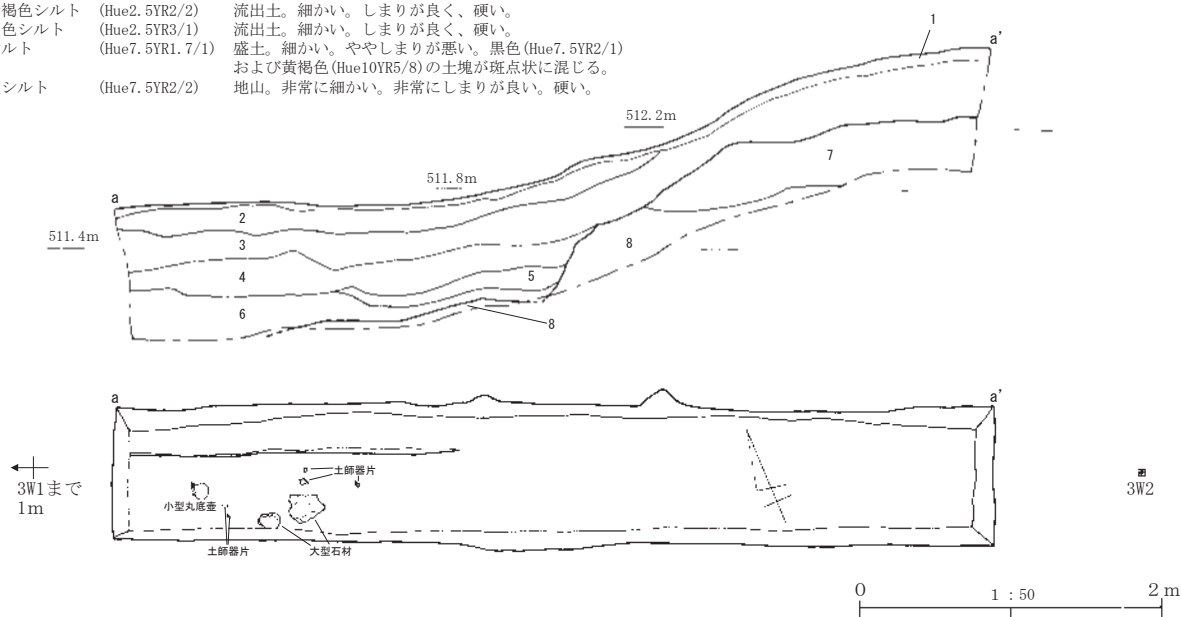


第6図 3号墳トレンチ配置図

の傾斜が急となる。そして、測量基準点3W1の東側3.0～4.4 mの範囲では再び平坦面を形成し、3.0 mより西になると再度レベルを下げていく。ただし、今回の調査では、2.7 mより西側においては第8層上面の全体を検出できていないため、どの程度レベルを下げるのかは未確認である。とはいえ、

から西へ2.2 mの範囲において確認した。この土層はややしまりが悪く、黒色および黄褐色の土塊が斑点状に混じる。この土塊は地山起源のローム土であると推測される。こうした点から、第7層を盛土であると判断した。なお、第7層の直上より土師器片が出土している。第7層の下位には、きわめて硬くしまった黒褐色シルトの土層（第8層）を確認した。この層は、粒子が非常に細かく、しまりがきわめて良い点に加え、遺物の出土がない。以上の点から、第8層を古墳築造前に堆積した層、つまり地山であると判断した。第8層は測量基準点3W1の東側2.7～6.4 mの範囲において見られる。そのうち、測量基準点3W1の東側5.1 mより東では、その上面はほぼ水平面をなすが、4.4～5.1 mにかけては上面

- | | | |
|------------|-----------------|---|
| 1 赤黒シルト | (Hue10R1.7/1) | 表土。粗い。非常にもろい。草木の根が多く混じる。 |
| 2 黒色シルト | (Hue7.5YR2/1) | 流出土。やや粗い。非常にもろい。 |
| 3 黒色シルト | (Hue5YR1.7/1) | 流出土。やや粗い。もろい。 |
| 4 赤黒シルト | (Hue7.5R1.7/1) | 流出土。細かい。しまりが良く、硬い。 |
| 5 極暗赤褐色シルト | (Hue2.5YR2/2) | 流出土。細かい。しまりが良く、硬い。 |
| 6 暗赤灰色シルト | (Hue2.5YR3/1) | 流出土。細かい。しまりが良く、硬い。 |
| 7 黒色シルト | (Hue7.5YR1.7/1) | 盛土。細かい。ややしまりが悪い。黒色(Hue7.5YR2/1)および黄褐色(Hue10YR5/8)の土塊が斑点状に混じる。 |
| 8 黒褐色シルト | (Hue7.5YR2/2) | 地山。非常に細かい。非常にしまりが良い。硬い。 |



第7図 3号墳西トレンチ平面図・断面図

こうした状況から測量基準点 3W1 の東側 3.0 m～4.4 m の範囲の平坦面は、墳端平坦面であると捉えられよう。すなわち、地山を成形して墳丘西側の墳端を造り出した状況が推定できる。

古墳築造後に堆積した土層を確認すれば、第 8 層（地山）のうち平坦面をなす部分の上位には、第 6 層、第 5 層、第 4 層が順に、いずれも水平に堆積している。これら 3 つの土層は、粒子が細かい点やしまりが良い点でよく似た様相を呈しているが、色調が異なることから区別できる。第 5 層が特に黒色の強い土層であり、これをあいだに挟む形で第 4 層と第 6 層が存在している。また、第 6 層と第 8 層はよく似るが、第 6 層のしまりがわずかに弱いことから分層することができる。これらの上位には第 1～3 層が墳丘斜面の傾斜に沿うように堆積している。第 4～6 層に比べてこれらの土層のしまりは悪く粒子も粗い。

遺物は、ほぼ完形の小型丸底壺が第 6 層のうち測量基準点 3W1 の東側 2.2 m、標高 510.9 m の地点から出土した。この周辺では土師器片 5 点も出土している。同様に、石棺材の一部と推測される安山岩片 2 点が第 6 層から出土した。出土地点の標高は 510.9 m で、小型丸底壺および土師器片 5 点とほぼ同一レベルである。いずれも第 8 層の直上ないしそれに近い位置である。また、第 3 層のうち第 7 層の直上にあたる地点においては、土師器片 2 点が出土した。今年度出土したこれらの遺物は、すべて原位置を留めていなかった。なお、出土地点の詳細は未確認であるが、古墳築造後の堆積土より石棺材の一部と推測される小型の石材が 3 点出土している。（有本）

4. 小結

西トレンチでの調査結果をもとに、3 号墳について現時点での見解を以下に述べる。

確認できた土層から、3 号墳では、第 8 層（地山）を削り出すことによって整地を行い、その上部に第 7 層（墳丘盛土）を施して古墳を築造したと推測される。

墳丘ラインは、墳丘盛土と整地された地山からなる、第 7～8 層の上面である。このラインが、測量基準点 3W1 の東側 4.4～7.2 m の範囲では斜面をなし、3.0～4.4 m の範囲では平坦になる。このような状況から、斜面の下端、測量基準点 3W1 の東側 4.4 m の地点を墳端、その西側の平坦面を墳端平坦面と考えることができる。測量基準点 3W1 の東側 2.7 m より西の範囲では、さらに第 8 層（地山）が落ち込むと推測され、その部分に墳丘を画する溝が形成されている可能性がある。第 6 層は、この墳端平坦面から溝にかけての上部に堆積したものと考えられる。

一方で、測量基準点 3W1 のとくに東側 4.4～4.8 m にかけての傾斜角がきわめて急であること、第 8 層（地山）の直上付近より石棺材の一部と推測される安山岩片が出土していることから、墳丘西側は後世の削平を受けている可能性も考えられる。その場合、本来の墳丘ラインを復元できていない可能性も否定できない。

葺石については、第 5 次調査報告（與嶺・入江編 2015）にて、現状の墳丘斜面上に葺石の一部と思われる円礫が点在する旨が報告されている。しかし、西トレンチ内からは葺石と思われる石材の出土がないため、3 号墳は葺石を有さない可能性が高いと考えられる。

なお、第 5 次調査報告において、3 号墳が方墳である可能性が指摘された。そのため今回の調査では、3 号墳が方墳であるのか円墳であるのかを明らかにすることが調査目的の 1 つであった。しかし、当初は数カ所設定する予定であった調査区を調査期間の関係で 1 カ所にとどめたために、墳形を判定するまでには至らなかった。次年度以降はさらに複数の調査区を設け、3 号墳の墳丘規模・構造の把握に努めたい。（有本）

五 6号墳の発掘調査

1. 墳丘の現状（第8図・図版1－2）

平原6号墳は南尾根グループに所在する円墳で、その住所は熊本県阿蘇市山田字平原490番地である。3号墳の北西約65mの場所である。6号墳の墳頂最高点は標高529.722mである。墳丘斜面はほぼ一定の傾斜をなし、東側では523.9m、西側では526.3m、南側では524.6m、北側では524.9mの位置で、ほぼ水平に変化している。それらの地点を墳端と考えると、6号墳は東西31.3m、南北30.0m、高さ3.4～5.8mの円墳と推測される。また、墳丘の周囲は東側で523.4m、南側で523.8m、北側で524.2mの地点で再び斜面傾斜がはじまるため、それぞれの地点で幅数mの墳端平坦面が存在すると推測される。西側に関しては、墳端平坦面の様子ははっきりとしない。また、周溝は確認できない。なお、標高529.3m以上を墳頂平坦面とすると、その広さはおよそ東西9.3m、南北7.0mである。墳頂平坦面の東側には盗掘坑と見られる窪みが存在する。6号墳の西側には近接して平原7号墳が築かれている。6号墳と7号墳の墳端間距離は6mである。（崎谷）

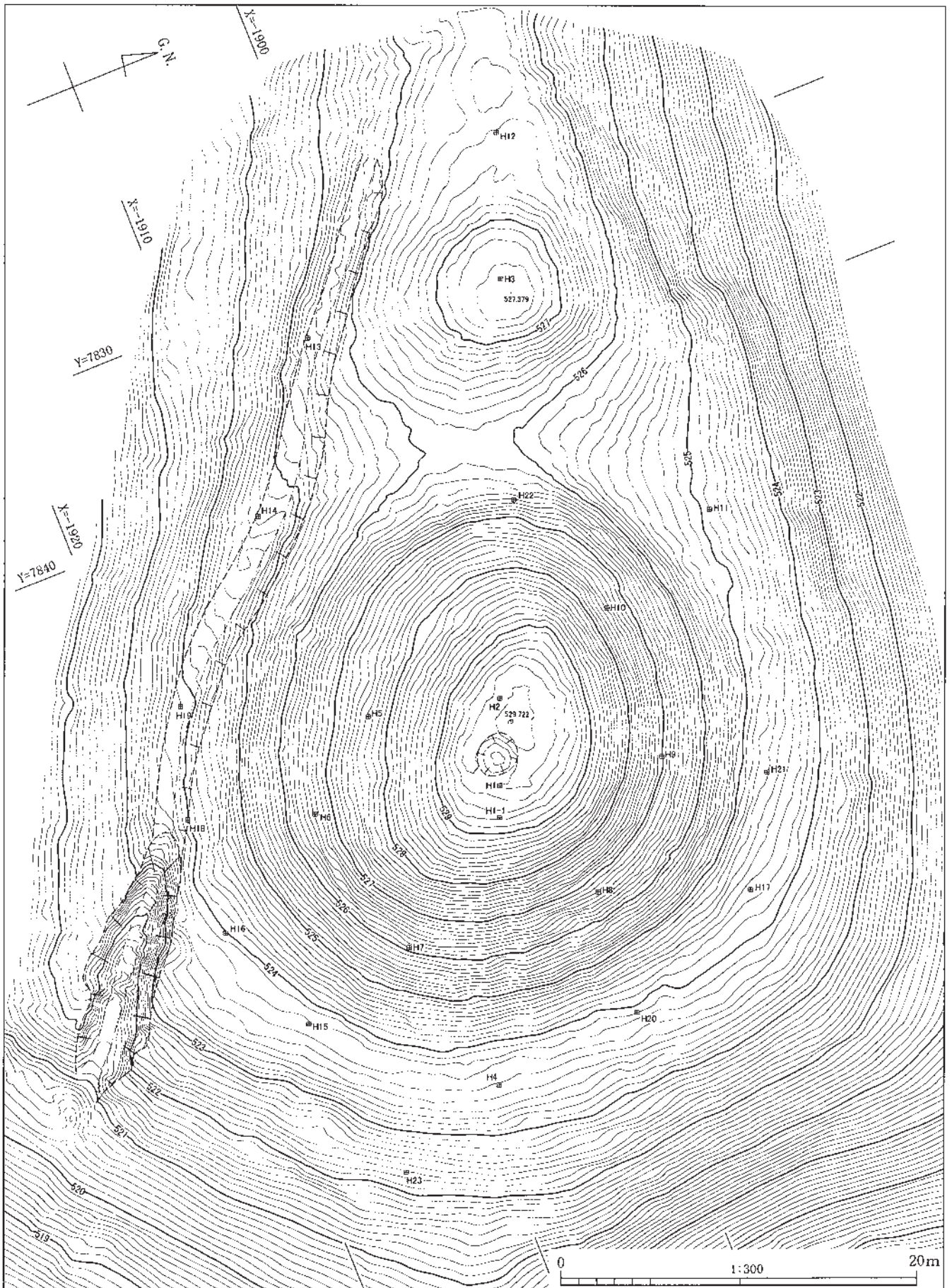
2. 第5次調査までの所見（第9図）

過去の調査成果をもとに6号墳の墳丘形態を見ていく。2012～2014年の第3～5次調査を通して、6号墳墳丘の東西南北4方向と墳頂部にそれぞれトレンチを設定した（第9図）。6号墳は大きな削平を受けることなく、築造時の状態を良好に保った葺石を有する2段築成の円墳で、墳頂平坦面には礫敷きが施工されている。段築1段目の葺石はすべてのトレンチで検出されている。段築1段目の基底石下端面の標高は、東1トレンチ・南1トレンチで523.7m、西1トレンチで525.5m、北1トレンチで524.5mである（第7表）。墳端平坦面は、東1・南1・北1トレンチでは全体が、西1トレンチではその一部が確認されている。東1・南1トレンチで標高523.3m、北1トレンチで524.0mの地点で傾斜が変化しているため、基底石からその地点までが墳端平坦面であると考えられる。墳端平坦面は1.9～2.0mの幅で墳丘の外側をめぐるものと推測される。段築テラス面は、東1・西1・北1トレンチで確認されている。段築テラス面の幅は、東1トレンチで1.4m、北1トレンチで1.5m程度であると推測される。段築テラス面の標高は東1トレンチで525.5～525.6m、西1トレンチで526.6～526.7m、北1トレンチで526.0～526.2mである。段築2段目の葺石は、東1・西1・北1トレンチで確認されている。段築2段目の基底石下端面の標高は、東1トレンチで525.6m、西1トレンチで526.7m、北1トレンチで526.2mである。墳頂平坦面は東1・西1・北1トレンチおよび墳頂トレンチ東・西区で確認されている。東1トレンチで標高528.6m、西1トレンチで528.8m、北1トレンチで528.7mの位置から墳頂平坦面がはじまると推測される。

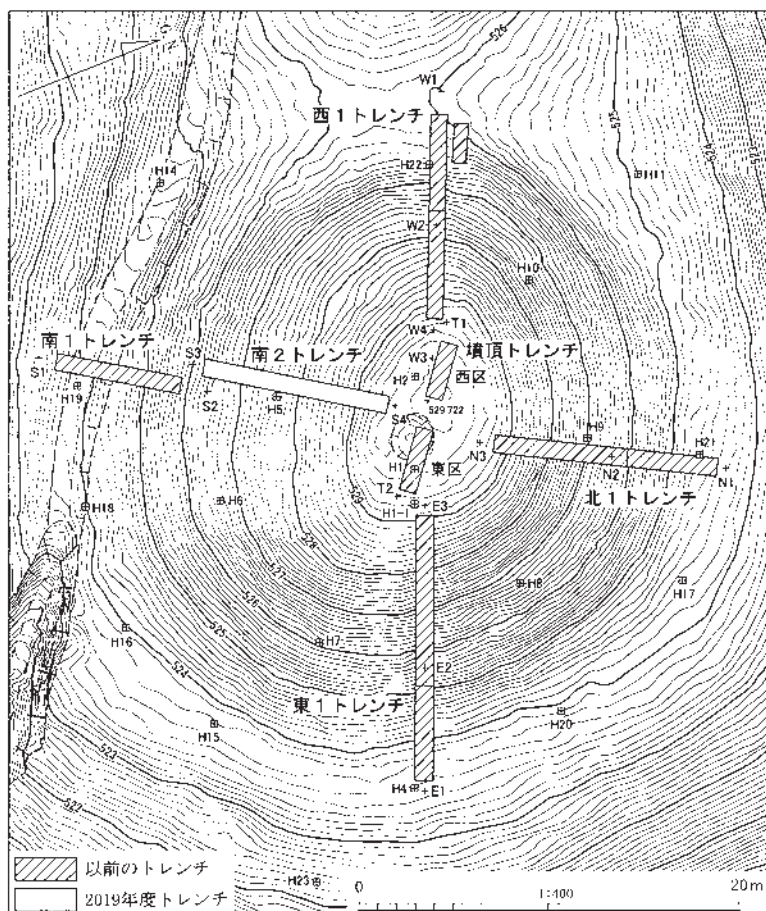
以上のように、第3～5次調査において6号墳の墳丘構造を一定程度解明することができた。しかし、墳丘南側の段築テラス面より上位の様相は未確認であり、その解明が今後の課題として残されていた。（崎谷）

3. トレンチの設定（第9図）

今年度の調査では、墳丘南側の段築構造の解明を目的として、南側斜面の上半部に1カ所のトレンチを設定した。南2トレンチと呼称する。トレンチは、2013年の第4次調査時の南1トレンチを墳



第8図 6・7号墳丘測量図(上:7号墳 下:6号墳)



第9図 6号墳トレンチ配置図

頂方向へ拡張することも考えたが、樹木に遮られることから、南1トレンチのやや西に設定した。その規模は、幅1 m、長さ10 mである。(崎谷)

4. 調査の所見(第10図、図版4～6)

南2トレンチは、墳丘南側の段築構造の解明を目的として設定したトレンチである。規模は幅1 m、長さ10 mであり、トレンチ北端は測量基準点S4より南に約0.4 mの位置にある。

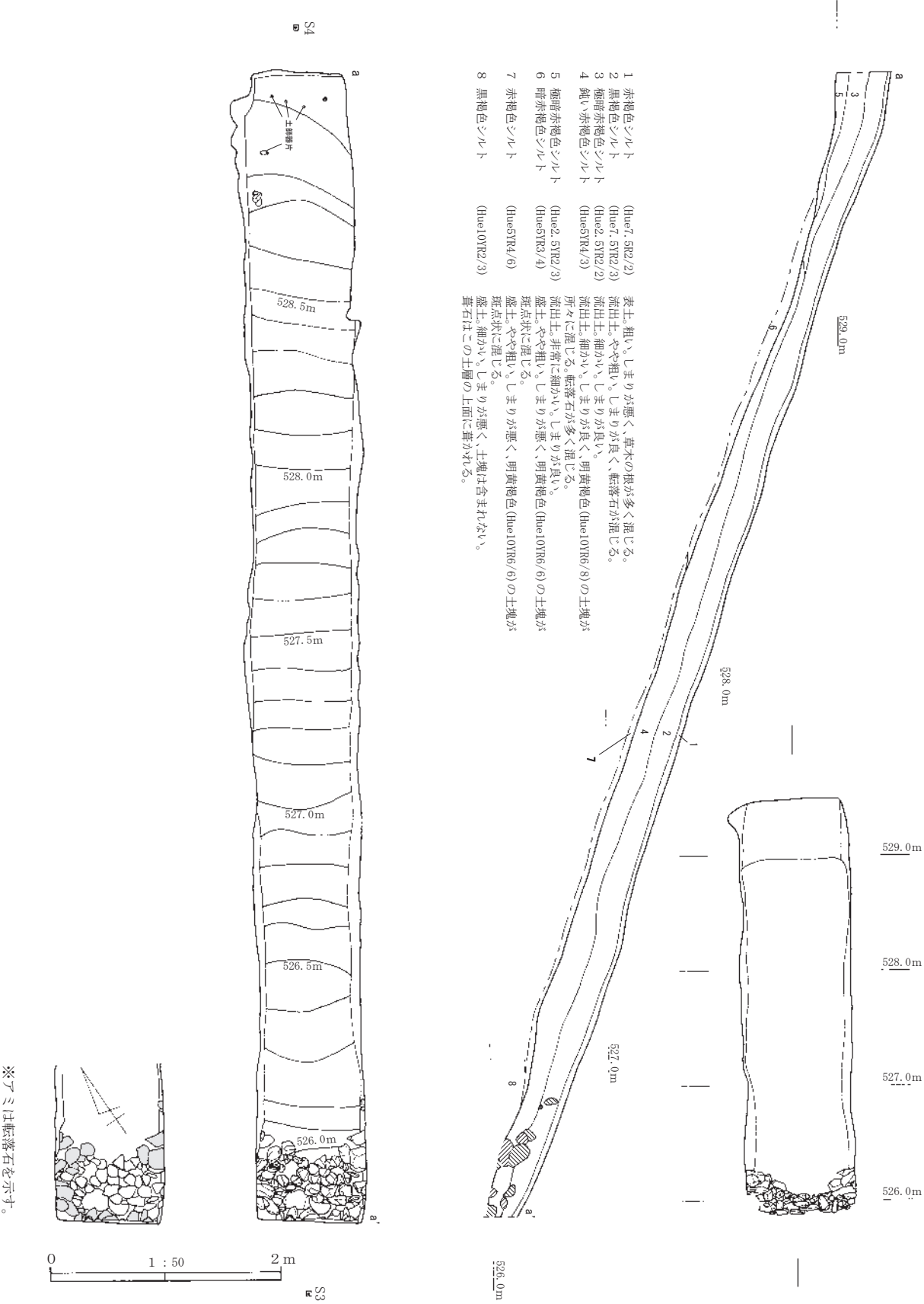
調査の結果、トレンチの南端部では地表から0.3～0.4 m掘り下げた地点で段築1段目の葺石を検出した。葺石は測量基準点S3から北へ0.6～1.2 mの範囲で検出し、その標高は525.9～526.0 mである。当該地点の葺石はほぼ隙間なく組み合わせあって残存している。なお、葺石石材は角が取れて丸みを帯びており、河原石を使用している

と思われる。酸化により赤みがかった石材が一部あるが、主に白色および灰色の石材が使用され、大きさは10～30 cmである。また、葺石の傾斜は約18°である。

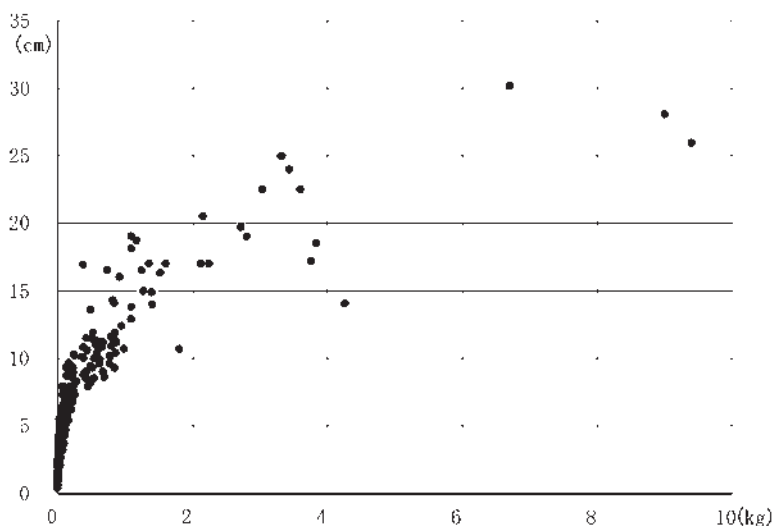
段築1段目上端部に残存する葺石の地点よりもわずかに北側の標高526.2 m地点では、傾斜が約20°から約15°へと変化するため、この地点付近が段築テラス面であると推測する。段築テラス面に敷石は確認できなかったが、段築1段目の葺石上部で検出された転落石のなかには1～10 cm程度の小礫が多く含まれており、それらが段築テラス面の敷石であったと考えられる。また、段築テラス面の幅は傾斜変換点から推測すると0.9 m程度となる。この幅は測量基準点S3から北へ約1.5～2.4 mの範囲に位置するものであり、墳丘の北側や東側で確認された段築テラス面より若干幅が狭い点に注意される。ただし、段築テラス面の小礫が流失していることから現状の段築テラス面の位置、および幅には不確定な点があることを断っておく。

段築2段目においては、地表から0.4～0.5 m掘り下げた地点、標高526.2～528.8 mの高さで墳丘盛土と見られる明黄褐色の土塊を斑点状に含む暗赤褐色シルト層(第6層)および赤褐色シルト層(第7層)を検出したものの、葺石はまったく検出されなかった。しかし、段築1段目の葺石上部には多くの転落石を確認しており、そのなかには第3～5次調査において確認された葺石と同様の大きさや形状のものが一定数見られることから、これらは段築2段目葺石の転落石であると考えられる。したがって、古墳築造当時の段築2段目には葺石が葺かれており、築造後に何らかの理由ですべて流失したものと推測される。なお、段築2段目の傾斜は約19°である。

トレンチの北端付近よりもやや南側、測量基準点S4から南へ1.7 m、標高528.8 mの地点では傾斜が約19°から約10°へと急激に変化することから、当該地点より北側が墳頂平坦面であると判断し



第 10 図 6 号墳南 2 トレンチ平面図・断面図・立面図



第 11 図 6号墳南2トレンチ出土転落石の長さ質量比

た。墳頂平坦面の標高は東1・西1・北1トレンチで確認された標高とほぼ同じであるため、墳頂平坦面の標高差を無くすようにして構築されたことが考えられる。これに関しては次節で詳述する。そして、トレンチ北端部においてわずかなではあるが小礫を検出している。2014年度の第5次調査では墳頂平坦面に小礫が敷かれていたことが確認されており、今回検出した小礫はその一部と考えられる。

今年度の調査では表土および流出土を5層に分層したが、それらは主にシルト質の土であった。そのなかでも段築1段目葺石上部で検出された転落石は、鈍い赤褐色シルトの第4層で多く見られた。また、今年度の調査で検出した第6層（盛土）は、第4次調査の南1トレンチで検出された第8層（盛土）と同質のものと見られる。

古墳に伴う遺物は、トレンチ内の墳頂平坦面で土師器片が、トレンチ南端部の転落石中より壺形埴輪片および土師器片が出土した。トレンチ南端部で出土した遺物は原位置を留めているものではないが、墳頂平坦面において出土した土師器片については原位置を留めている、あるいは原位置に近い位置にあると考えられる。

（姫野）

5. 葺石石材の分析（第11図、図版10-1）

南2トレンチで出土した転落石のうち取り上げ可能であったものを持ち帰り若干の分析を行った。

転落石のなかで多数を占める岩種は安山岩であり、角閃石安山岩、輝石安山岩が見られる。ほかに少量の溶結凝灰岩が確認できる。色調が白色を呈する岩石が多く見受けられることから、視覚効果を狙って意図的に白色石材を選択し葺石として利用していたと考えられる。さらに、表層地質図（岩本ほか1995）を参照すると、平原古墳群が位置する阿蘇市山田地区周辺には安山岩質の輝石角閃石デイサイト火砕岩が分布していることが確認できる。デイサイトは、マグマが急速に冷やされることでできたやや白色を呈する岩石である。このことから、6号墳の墳丘面に葺石として利用された石材は、平原古墳群の近傍地で産出するものであることがわかる。また、角がとれ丸みを帯びた河原石のような石材が多く見受けられる。以上のことから第5次調査報告（與嶺・入江編2015）でも言及されているように、墳丘北側の谷部の沢で石材を入手していたと考えられ、特別に遠隔地から持ち込まれたものではないと推測できる。

今回検出した石材の大きさは、1～10 cm程度の小礫、そのほか10 cm～30 cmであった。これまでの調査成果を踏まえると、小礫は段築テラス面に敷かれていたものであると推測され、そのほかの石材は墳丘斜面上で葺石として利用されたものだと考えられる。また、第11図からもわかるように重量が6 kgを超える大型の石材が3点確認できた。これらの石材は基底石に用いられていた可能性も考えられる。

（牟田）

6. 墳丘形態の復元（第12図、第7表）

6号墳は後世の削平をほとんど受けることなく、築造当時の状態を良好に保つ古墳である。2012～2014年の第3～5次調査と今年度の調査を通して、墳丘の東西南北4方向と墳頂部にトレンチを設定した。調査の結果、東西南北のいずれにおいても段築1段目の葺石が確認された。また、墳端平坦面は東1・南1・北1トレンチでは全体が、西1トレンチでは一部が検出されている。段築2段目の葺石は東1・西1・北1トレンチでは確認できたが、南2トレンチでは確認できなかった。一方、段築テラス面および墳頂平坦面は東西南北すべてのトレンチで確認できた。墳頂部では、第5次調査で設定した東・西区のトレンチから墳頂平坦面に小礫が敷かれていたことや盛土の状況が明らかになっている。ここでは、今年度の調査を含むこれまでの調査成果をもとに墳丘形態の復元を行う。

段築 墳端平坦面の全体は、西1トレンチを除く3つのトレンチで確認されている。東1・南1トレンチでは標高523.3m、北1トレンチでは標高524.0mの地点に傾斜変換点があるため（第7表）、その地点までが墳端平坦面の範囲だと思われる。墳端平坦面は、段築1段目基底石から傾斜変換点までの1.9～2.0mの幅で墳丘の外側を巡っていたと推測される。

段築1段目の葺石はすべてのトレンチで確認されている。残存している石材は、かみ合うようにして葺かれている。基底石には長さ20～40cmの比較的大きな石材を用いている。段築1段目基底石下端面の標高は、東1トレンチで523.7m、西1トレンチで525.5m、南1トレンチで523.7m、北1トレンチで524.5mである。また、段築1段目上端の標高は東1トレンチで525.5m、南2トレンチで526.2m、北1トレンチで526.0mである。墳端は墳丘の西側と東・南側とでは比高差が1.8m程度であるのに対し、段築1段目上端では比高差が最大0.7m程度と墳端に比べて小さくなっている。

段築テラス面は東1・西1・南2・北1トレンチで確認されている。東1・西1・北1トレンチでは1～10cmの小礫が段築テラス面に敷かれていたことが確認されている。南2トレンチでは段築テラス面に小礫が敷かれていたことを確認できなかったものの、段築1段目葺石上部には1～10cmの小礫が堆積しており、これらは段築テラス面の小礫が転落したものと考えられる。したがって、墳丘全体を通して段築テラス面には小礫が敷かれていたものと思われる。確認された小礫の残存状況および復元される段築1段目葺石と段築テラス面の位置から、段築テラス面の残存幅は東1トレンチで1.4m、南2トレンチで0.9m程度、北1トレンチで1.5m程度である。西1トレンチでは段築テラス面に小礫が敷かれていたことは確認できたが、段築テラス面付近の段築1段目葺石が検出されなかったため、正確な幅を復元することができなかった。また、標高は東1トレンチで525.5～525.6m、西1トレンチで526.5～526.7m、南2トレンチで526.2～526.4m、北1トレンチで526.0～526.2mであり、比高差は最大1.2m程度である。

段築2段目の葺石は、東1・西1・北1トレンチで確認されている。石材は段築1段目と同様、かみ合うようにして葺かれている。東1・西1トレンチでは大小の石材が組み合わさって使用されているのに対して、北1トレンチでは墳頂部に近い石材ほど大きい傾向にある。南2トレンチでは段築2段目の葺石を確認できなかったが、段築1段目上端の葺石上部に段築2段目の葺石と思われる大きさ15～30cmの転落石が堆積していたことから、段築テラス面の小礫と同様、古墳築造時には葺石が存在していたと考えられる。段築2段目基底石下端面の標高は東1トレンチで525.6m、西1トレンチで526.7m、北1トレンチで526.2mである。南2トレンチは段築テラス面をもとに考えると、526.4m付近であると推測される。以上より、段築2段目基底石下端面の比高差は最大1.1m程度であり、墳端の最大比高差1.8m程度と比べて比高差が小さくなることが明らかである。このことから

墳端で生じた比高差を解消するようにして墳丘を構築したことがわかる。また、段築テラス面や段築2段目の基底石の位置、現在の地形などから段築2段目は東西に長い楕円形を呈すると推測される。

墳頂平坦面は東1・西1・南2・北1トレンチおよび墳頂トレンチの東・西区で確認されている。東1トレンチでは標高528.6m、西1トレンチでは528.8m、南2トレンチでは528.8m、北1トレンチでは528.7mの位置から墳頂平坦面が始まると推定される。墳頂平坦面では墳端において生じていた比高差がほとんどなくなっており、墳頂平坦面の比高差を無くすようにして墳丘が構築されたものと思われる。また、墳頂部には墳頂トレンチ東・西区の調査によって小礫が敷かれていたことが明らかとなっている。

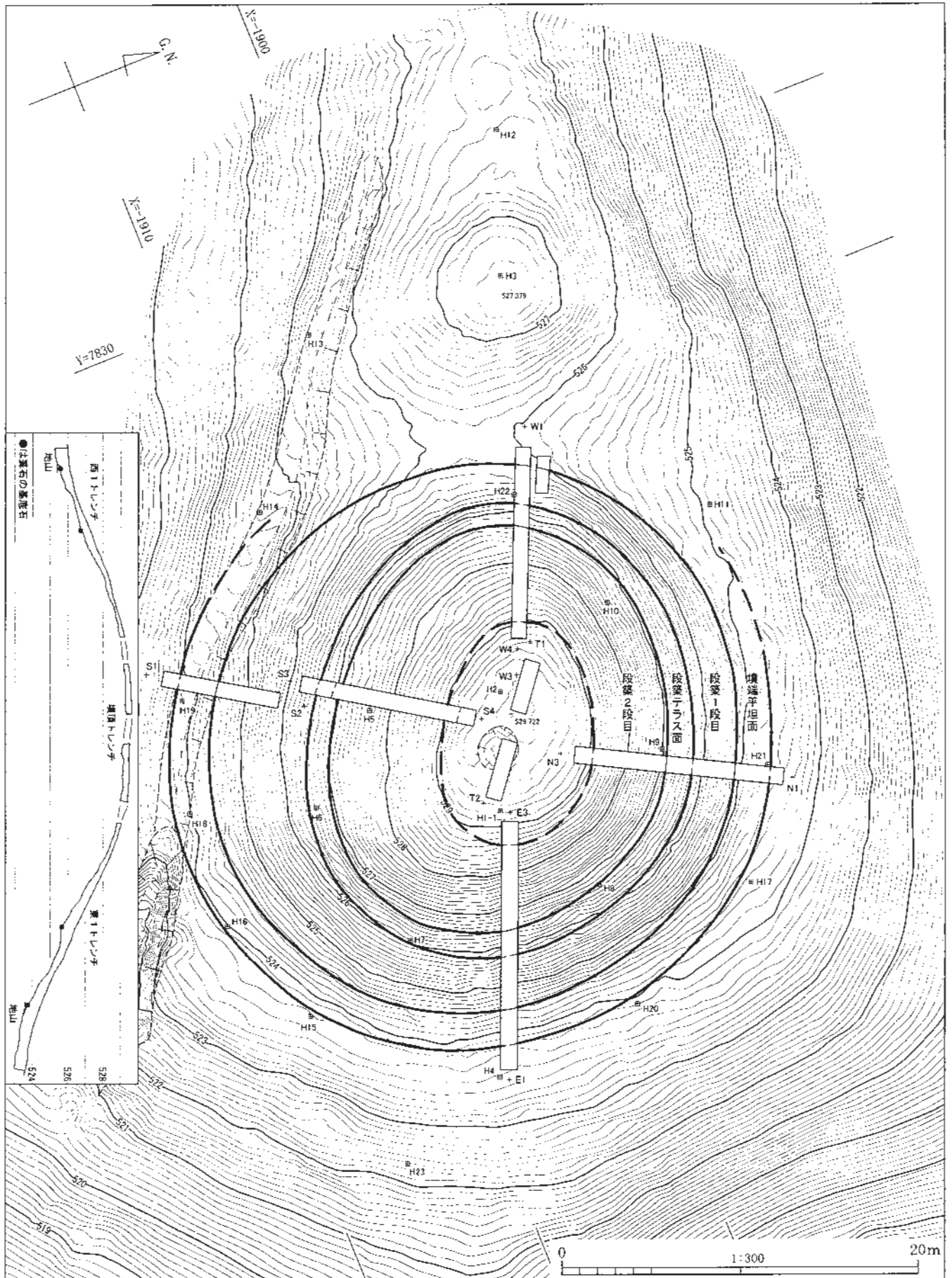
墳丘構築 墳端の成形技法には東1・西1・北1トレンチと南1トレンチとで差異が見られた。東1・北1トレンチではアカホヤ層、西1トレンチではローム層まで整地を行っており、いずれも地山を削り出して古墳の土台とする地山成形が採用されている。一方、南1トレンチではアカホヤ層に達するまで整地した後、整地した面に薄い盛土を施して墳端平坦面を成形している。このように墳端平坦面の成形技法に差異が見られるのは、古墳築造以前の旧地形が関係していると思われる。南1トレンチでは盛土による墳端平坦面の成形を行ってはじめて標高が東1トレンチの墳端平坦面の標高と同じになることから、旧地形において尾根筋の南側は標高が低かったことがうかがえる。以上より、旧地形で南北幅が短かったことを理由に、設計通りの墳丘を構築するためには盛土によって南北幅を広げる必要があったものと推測される。

葺石石材 葺石に使用される石材は角閃石安山岩がほとんどであり、少量の輝石安山岩を含む。また、ごく少量の流紋岩や溶結凝灰岩も認められる（安田編2013）。これらの石材は墳丘北側の谷部に流れる沢で入手することができるため、石材は遠隔地から持ち込まれたものではないと考えられる。使用石材の色調は白色が多いことから意図的に白色石材を選択していたものと思われる。

墳形と規模 現状の地形測量図と第3～6次調査の成果から、平原6号墳は2段築成の円墳で、直径は東西約31m、南北約30mの規模と推定される。直径の復元には各トレンチの段築1段目基底石の位置を根拠とした。また、墳端平坦面を含めた直径は南1・北1トレンチの傾斜変換点から、南北で約34mと推定される。東西は西側の墳端平坦面の幅が定かではないため、正確な復元が不可能である。墳頂トレンチ西区で検出された礫敷面の標高が529.2～529.3mであること、および各トレンチの段築1段目基底石下端面の標高から考えると、築造当時の墳丘の高さは3.7～5.6mだと考えられる。墳頂平坦面に関しては東1・西1・南2・北1トレンチで平坦面に移行するおおよその位置が確認されていることから、東西12.6m、南北9m程度の大きさである。したがって、墳頂平坦面の平面形は東西に長い楕円形であり、墳形は正円に近い形であると考えられる。（姫野）

第7表 6号墳墳丘各トレンチの計測値

		東1トレンチ	西1トレンチ	南1・2トレンチ	北1トレンチ
段築2段目	墳頂平坦面との境界（推定）の標高	528.6m	528.8m	528.8m	528.7m
	基底石下端面の標高	525.6m	526.7m	526.4m	526.2m
テラス面	幅	1.4m	—	0.9m程度	1.5m程度
段築1段目	段築テラス面との境界（推定）の標高	525.5m	526.6m	526.2m	526.0m
	残存葺石上端の標高	525.2m	—	526.0m	525.7m
	基底石下端面の標高	523.7m	525.5m	523.7m	524.5m
墳端平坦面	幅	2.0m	—	2.0m	1.9m
	外郭線の標高	523.3m	—	523.3m	524.0m



第 12 図 6 号墳墳丘形態復元図

六 8号墳の測量調査

1. 墳丘の現状（第13・14図、図版1－3）

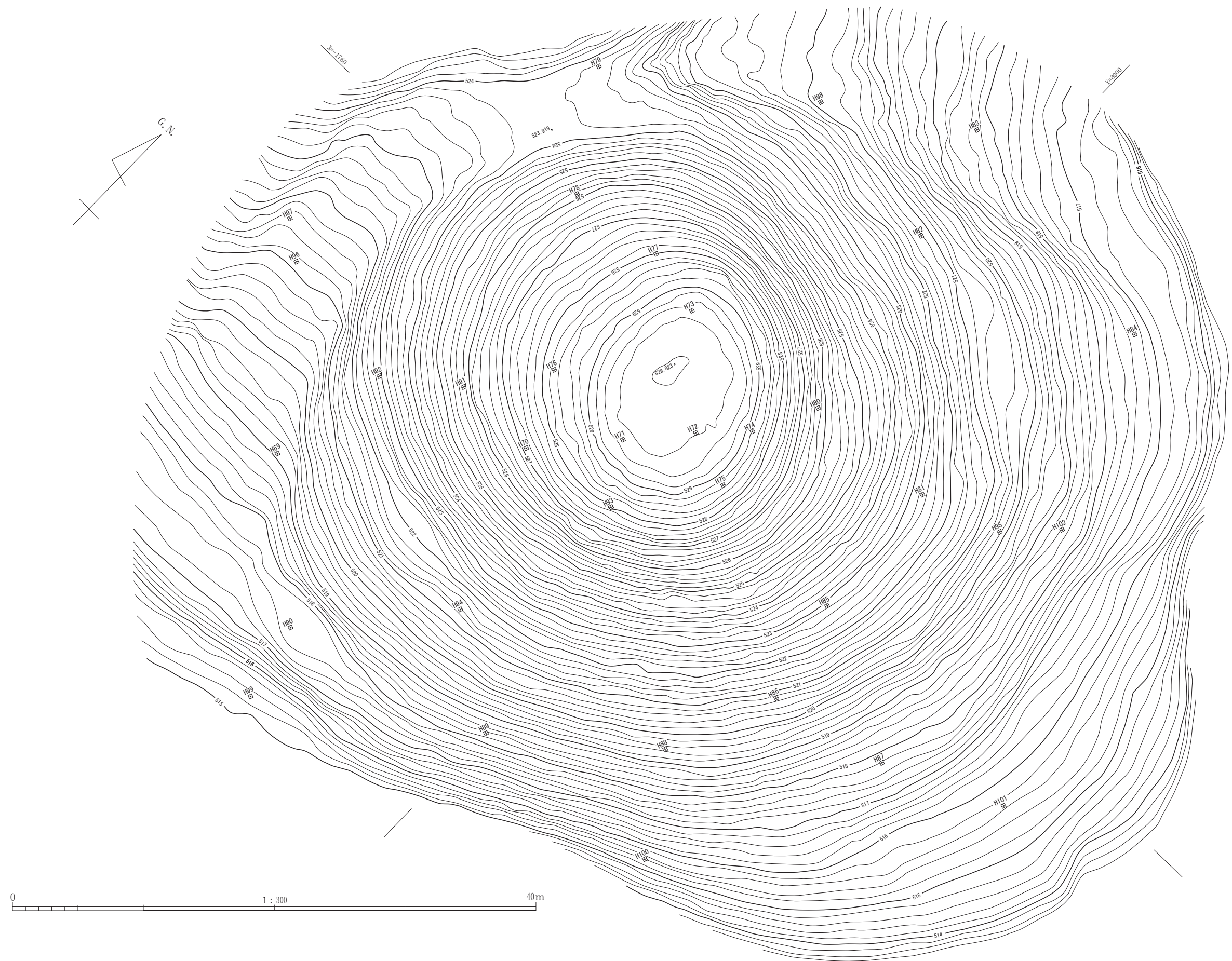
平原8号墳は熊本県阿蘇市山田字平原509－2に所在する円墳である。3号墳や6号墳などが位置する南尾根から、険しい谷部をはさんだ北尾根の南東端に位置する。杉が植林されているほか、多くの灌木が繁茂しており、見通しは悪い。

8号墳の墳頂最高点は標高529.823 mである。墳頂平坦面は標高529.2 m以上において見られ、東西9.0 m、南北12.5 mの楕円形を呈する。墳丘斜面はほぼ一定の傾斜をなしており、傾斜を大きく変えて、墳丘周囲の平坦面へ接続する箇所がある。墳丘東側の斜面では、測量基準点H 101の西、標高516.2 m辺りに確認できる。墳丘西側では、帯状に南北方向にのびる平坦地形（帯状平坦地形）の東側付近、標高523.8 m辺りに確認できる。墳丘南側では、測量基準点H 90の北側付近、標高518.0 m辺りに確認できる。墳丘北側では、測量基準点H 84付近、標高517.0 m辺りに確認できる。これらの地点をなめらかに結んだラインを墳端と捉えて8号墳の墳丘規模を考えると、東西60.3 m、南北65.5 m程度の円墳と推定できる。高さに関しては、西側の帯状平坦地形から見ると5.9 m、東側の測量基準点H 100付近から見ると15.0 mとなる。墳丘の周囲には、東側（測量基準点H 101付近）及び西側（測量基準点H 79の南側）において平坦面が認められる。墳丘東側の平坦面のさらに東側は大きく傾斜が変化し、急斜面となる。一方、墳丘西側においては、墳端の外側に墳丘に沿ってのびる帯状平坦地形があり、さらに西側には帯状平坦地形からの比高差が6 mもある台地状の平坦地形が存在する。その台地状平坦地形上面の標高と8号墳墳頂の標高がほぼ同じであることから、北西から南東へと伸びる北尾根を南北に掘り込み、その東側を8号墳の墳丘としている可能性が考えられる。なお、周溝の存在は確認することができない。また、この8号墳西側の台地状平坦地形には明確な墳丘を持つ円墳が3基確認できた。これらは、8号墳からはやや離れた位置にまとまって存在している（第4図A）。8号墳も含め、これらを一つのグループとして捉えれば、北尾根グループは現在、4基の円墳で構成されるものと考えられる。

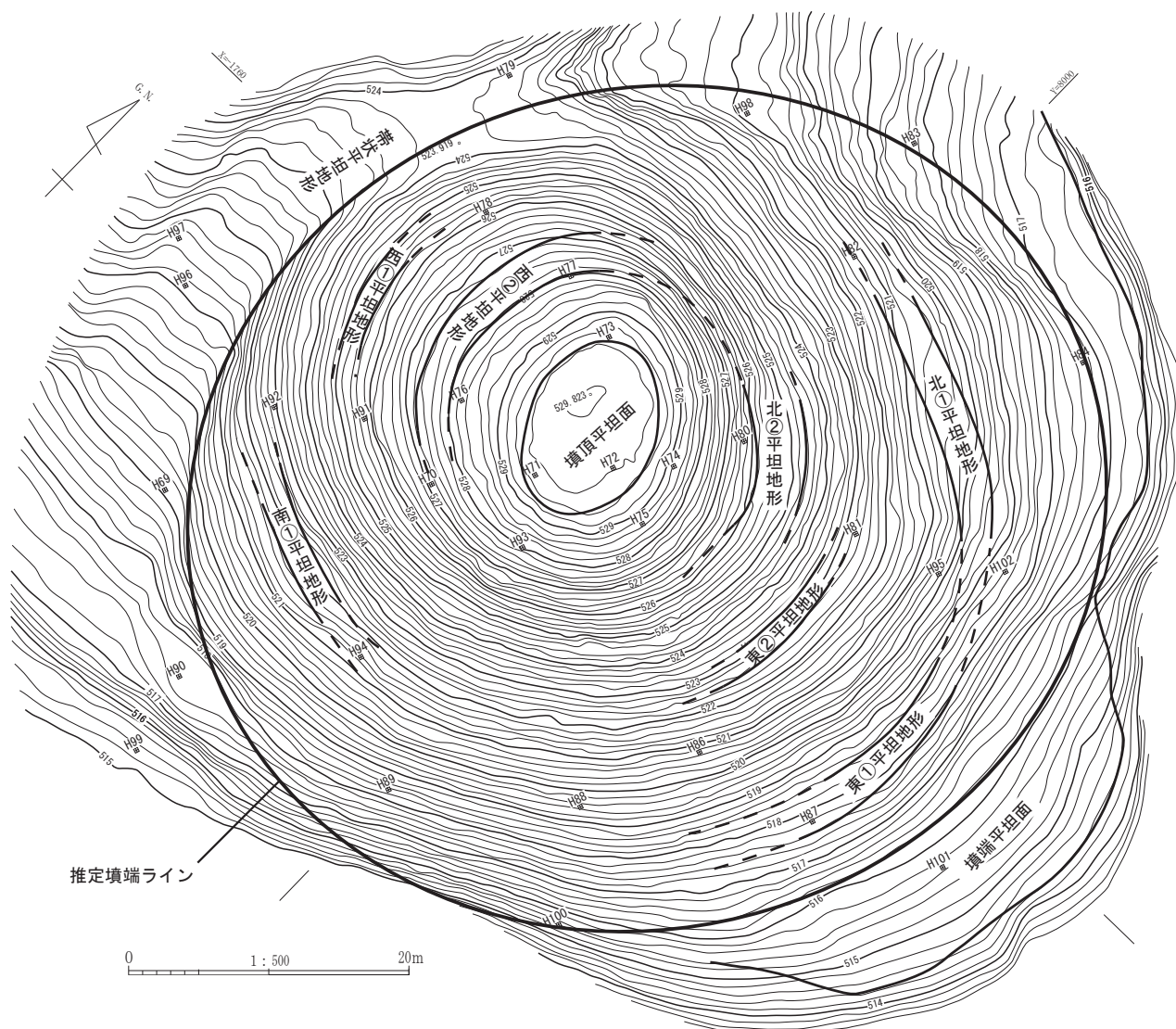
ところで、墳丘斜面には、傾斜が緩やかになる平坦地形がいくつか見られる（第14図）。墳丘東側の斜面には二つの平坦地形が確認できる。一つ目は、墳端平坦面から近い標高517.6～518.8 mの範囲である（以下、東①平坦地形とする）。二つ目は、斜面中腹にある標高522.4～523.2 mの範囲である（東②平坦地形）。墳丘西側の斜面には二つの平坦地形が確認できる。一つ目は、墳端の帯状平坦地形から近い標高525.0～525.8 mの範囲である（西①平坦地形）。二つ目は、墳頂平坦面から近い標高526.6～528.0 mの範囲である（西②平坦地形）。墳丘南側の斜面には一つの平坦地形が確認できる。斜面中腹にある標高521.4～522.6 mの範囲である（南①平坦地形）。墳丘北側の斜面には二つの平坦地形が確認できる。一つ目は、斜面中腹にある標高519.2～521.2 mの範囲である（北①平坦地形）。二つ目は、墳頂平坦面から近い標高524.6～526.2 mの範囲である（北②平坦地形）。このように墳丘斜面にはやや平坦となる地形が見られるが、現状の墳丘には目立った削平箇所は見受けられず、美しい円丘を保っている。

なお、墳丘斜面および周囲において、葺石と考えられる円礫は確認できなかった。遺物は、墳丘北側にある測量基準点H 98の周辺において土師器片を16点、また墳丘より一段下がった北東側の谷において須恵器片1点を採集した。

（河内）



第13図 8号填填丘測量図



第 14 図 8 号墳墳丘形態想定図

2. 小結

今回の測量調査の方法 今年度は、8号墳の墳丘規模と形状を確認するために測量調査を行った。測量は、レベルを使って等高線を探し、その座標をトータルステーションで計測することで、方眼紙に等高線を描くという方法による。トータルステーションと電子平板を用いた南尾根の測量図（第3図）は10cm間隔の等高線であるが、こちらは20cm間隔である。

8号墳の過去の認識 8号墳は1998年の『熊本県遺跡地図』（熊本県教委1998）で初めて登録された。ここでは「円墳」と記載され、2～7号墳が立地する尾根とは別の尾根にも古墳があることが確認されたのみであった。その後、2000年の『阿蘇町遺跡地図』（緒方編2000）では墳丘規模についても言及され、「墳丘規模約20m、円墳」と記載されている。8号墳の存在する尾根には、1998年の『熊本県遺跡地図』では7号墳（現在認識されている7号墳とは異なる）も登録されたが、「熊本県・市町村共同 行政情報インターネット地図公開システム」に示された最新の遺跡地図（<https://www2.wagmap.jp/pref-kumamoto/PositionSelect?mid=127&nm=熊本県遺跡地図&ctnm=熊本県遺跡地図>、最終閲覧日：2019/12/17）では削除されている。なお、遺跡地図に示された8号墳の位置は、実際の8号墳の墳頂から南東側に約50m離れていることが今年度の調査で確認できた（第2図）。

8号墳の規模と形状 8号墳は北尾根の南東端に位置する円墳で、墳丘東側の墳端平坦面のさらに南東側には傾斜の大きな斜面がある。現在の地表面にみられる傾斜変換点を墳端として仮定した墳丘規模は、尾根と平行する東西の幅を平面上で計測すると60.3 mである。また、尾根と直交する南北の幅は65.5 mとなる。これは肥後地域の中でも最大級の円墳である。8号墳墳丘の西側には南北にのびる帯状平坦地形が存在する。この帯状平坦地形のさらに西側に、比高差が6 mをはかる台地状平坦地形が存在する。この台地状平坦地形上面は、8号墳の墳頂とほぼ同じ標高である。そのためこの墳丘の西側を囲むように存在する帯状平坦地形は、墳丘と周囲を画するために掘り込まれた可能性も考えられる。そうであれば墳丘の大半が地山成形で造られていることになり、墳丘盛土は少ないと推測される。この場合、古墳築造前はなだらかで平坦な地形であったと考えられる。

8号墳の墳丘 (第13・14図) 墳丘斜面では、東西南北に段築テラス面と推測される平坦地形が見いだされる。どのように墳丘をめぐるか、以下において検討したい。

まず、墳端平坦面から最も近いところに東①平坦地形と北①平坦地形がある。これらは、尾根の傾斜に従って滑らかに接続することから、一連の平坦地形と捉えられる。北①平坦地形から東①平坦地形へかけての傾斜が南側斜面にものびるとすれば、南①平坦地形も一連の平坦地形と想定できる。この平坦地形を段築テラス面の一つだとすれば、最も墳丘の下段をまわることから、1段目の段築テラス面の可能性がある。なお西側斜面では、墳丘斜面上にこれに対応する平坦地形が確認できないため、墳丘を一周せず、北側から東側を通り南側まで続く平坦地形と捉えられる。

これより墳丘上部にも平坦地形が見られる。1段目の段築テラス面と同様の傾斜で東②平坦地形から南側斜面へ向けて延長線をたどれば、西①平坦地形がある。これらを一連の平坦地形と捉えることが許されるならば、2段目の段築テラス面と推定できる。これは、墳丘西側斜面では、最も墳端に近い段築テラス面となる。ただし、この平坦地形に対応する箇所が北側斜面、南側斜面では明確に確認できない。

墳丘西側、北側斜面にはもう一つずつ平坦地形がある。1段目の段築テラス面と同様の傾斜で西②平坦地形から墳丘北側斜面へ向けてその延長線をたどれば、北②平坦地形がある。これらを一連の平坦地形と捉えれば、3段目の段築テラス面となる。これも墳丘を一周する平坦地形と考えられる。

以上のように、墳丘をめぐる、段築テラス面の可能性をもつ平坦地形は墳丘東側斜面で3段、墳丘西側斜面で2段確認できる。そのため8号墳は墳丘東側斜面で4段、墳丘西側斜面で3段の段築をもつ円墳の可能性を指摘できる。ただし、段築の段間隔が一定でなく、現状で確認できる段築テラス面の幅も一定ではないため、この平坦地形が本来の段築を表していない可能性もある。あくまで現状の平坦地形からの推定であることに留意する必要がある。

なお、8号墳の墳丘斜面およびその周辺には葺石と考えられるような円礫は確認できなかった。このことから、8号墳は葺石を有さない可能性も考えられる。

調査の成果と課題 8号墳は、東西60.3 m、南北65.5 m程度の円墳であると推定した。墳丘斜面上で確認した平坦地形を根拠にすると、墳丘西側斜面で3段、東側斜面で4段の段築をもつ可能性がある。葺石と考えられるような円礫は確認できなかった。

以上、今年度の調査によって8号墳の墳丘規模・形状を一定程度解明することができた。しかし、墳丘斜面上で確認した平坦地形の全てが本来の段築テラス面であるかどうか確証がない点や8号墳のみの測量にとどまり南尾根グループ全体の古墳分布について検討できなかった点などいくつかの課題を残した。今後も継続的に調査を進め、平原古墳群全体の内容解明を目指したいと思う。(廣重)

七 遺物

1. 3号墳出土遺物（図版7）

3号墳では西トレンチからほぼ完形の小型丸底壺1点、土師器片6点、小型の石材3点、大型の石材2点が出土した。土師器片のうち、器種が判明するものは高坏の脚部片1点のみである。

（1）土師器（第15図、第8表）

小型丸底壺と高坏脚部片について報告する。

小型丸底壺（1） 1は小型丸底壺である。トレンチ西端部第6層より出土した。口縁端部が半周分ほど欠損しているが、ほぼ完形を保つ。単口縁である。口径7.2cm、器高10.1cm、胴部最大径9.6cmであり、口径が胴部最大径よりも小さい。外面調整では、口縁部にナナメハケの後粗い横方向のミガキが行われる。口縁端部には回転ナデが施されている。頸部には細かいタテハケが集中的に施される。胴部にはタテハケ・ナナメハケの後ナデが施され、さらに横及び斜め方向の粗いミガキが施される。底部には丁寧なナデが施されている。内面は口縁部にナナメハケの後ヨコナデが施され、さらに丁寧な横方向のミガキが行われている。胴部上端部近くには粘土のつぎ目が見られる。また、頸部と胴部および底部にコビオサエ痕が見られる。

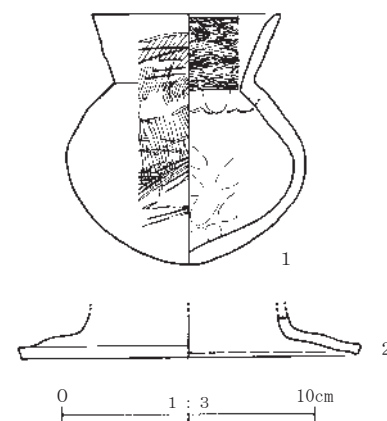
高坏（2） 2は高坏の脚裾部である。脚柱部と脚裾部の間に屈曲部を有するタイプである。復元した脚裾端部径は13.6cmである。調整は内外面ともナデである。

（2）石材（第16図）

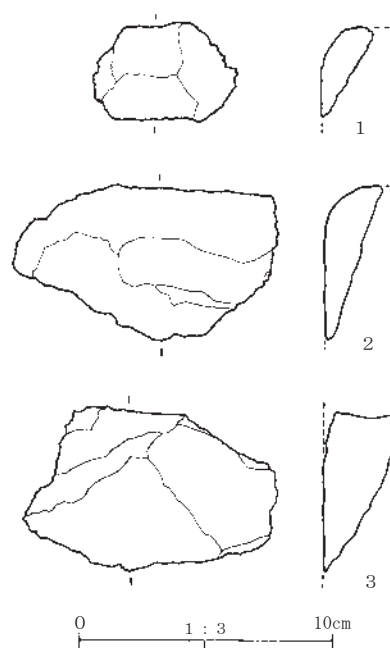
図示したものは、出土地点の詳細は未確認だが古墳築造後の堆積土から出土した小型の石材3点である（第16図、図版7-4右）。1・2は図の断面上端部が面取りによって丸く整えられ、その下部は平坦に整えられていることから、丸く整えられた箇所を上部とする石棺側石あるいは小口石の破片である可能性が高い。3は上下の判定が不可能であるが、平坦に整えられた面を有す。

大型の石材2点（図版7-4左）はトレンチ西側の第6層で出土したものである。うち写真左側の石材には一部に平坦面が見られる。その上下の長さは、17.9cmである。

これら大小5点の石材のいずれにも赤色顔料の塗布は見られない。石材は、いずれも同質の輝石安山岩である。この点を重視すれば、これらの石材は石棺材であった可能性が考えられる。（松本青）



第15図 3号墳出土土師器実測図



第16図 3号墳出土石材実測図

第8表 3号墳出土土師器一覧表

No.	種類	器種	残存部位	法量 (cm)			調整	色調	焼成	備考	出土地点
				口径	底径	器高					
1	土師器	小型丸底壺	ほぼ完形	7.2	—	10.1	外：ナデ・タテハケ・ナナメハケ・回転ナデ・ミガキ 内：ナナメハケ・ヨコナデ・ミガキ・コビオサエ	外：橙 内：明褐	良好	口縁端部が半周分ほど欠損。	西トレンチ
2	土師器	高坏	脚裾部	—	(13.6)	—	外：ナデ 内：ナデ	外：浅黄橙 内：にぶい橙	やや良好		西トレンチ

※（ ）は復元径。

2. 6号墳出土遺物（図版8・9）

（1）壺形埴輪（第3～6次調査出土）（第17・18図、第9表）

今年度の調査では、壺形埴輪片が56点（南2トレンチ内38点、採集18点）出土した。原位置を留めるものはない。これらはすべて破片であり、第3～5次調査出土のものを加えると計824点を数える。以下、今年度出土した壺形埴輪に加え、第3～5次調査出土のものについてもあわせて報告する。

単口縁（1～6） 口縁部から底部までが接合できる個体は確認されていない。その形状から口縁部は外湾気味に大きく開くタイプ（1）と外傾しながら直線的に開くタイプ（2～6）とに分けられ、いずれも端部に面をもつ。1は残存状態がよく胴部下半部まで確認することができる。この胴部は最大径20.6cm、残存長28.0cmである。胴部は長胴と推測される。頸部の稜は不明瞭で、肩はあまり張らない。調整は、多くの個体の外面にはタテハケ・ナナメハケが施される。1の胴部には横方向のケズリも施され、器壁が薄く調整されている。赤みがかった破片があるが、赤色顔料が塗布されたものであるかどうかはわからない。また、1は外面に黒斑を有する。3においては、肩部に装飾的なヨコハケが施される。内面にはヨコハケ・ナナメハケの後、ヨコナデが施される。頸部付近にはユビオサエ痕が集中して見られ、ナデも施される。

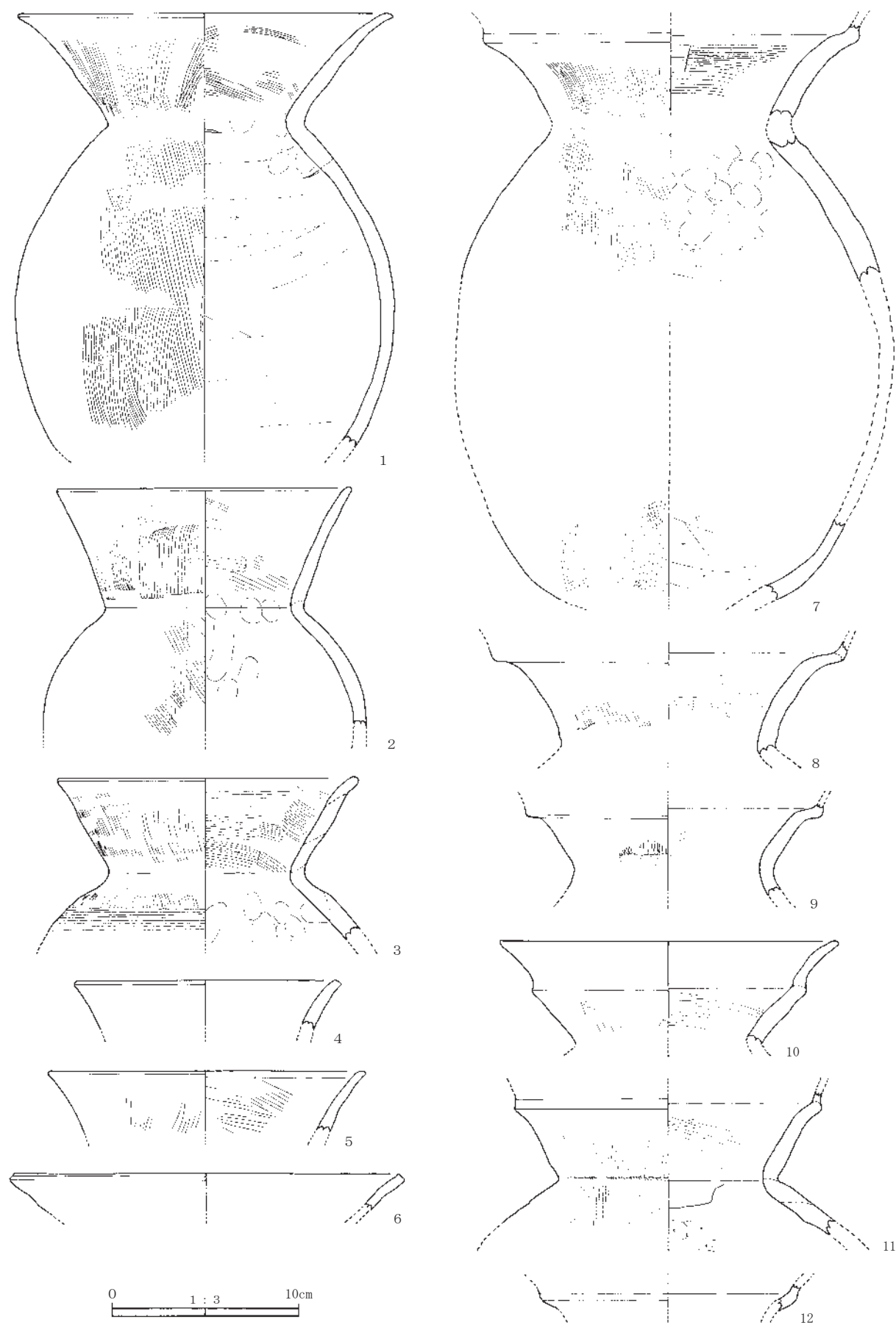
二重口縁（7～12） 単口縁のものと同様に全形をうかがうことのできる個体は確認されていない。いずれも第一口縁部に第二口縁部をそのまま載せたような形を呈する。さらにこれらは、第一口縁部付近で外湾するタイプ（7～9）と直線的に開くタイプ（10～12）とに分けられる。どの個体も第一口縁部と第二口縁部の境は比較的明瞭である。7は2013年度に北1トレンチ段築2段目基底石付近より、破片がまとまって出土した個体である。色調・胎土が類似することから、同一個体として復元した。口縁部は有段部から頸部にかけて残存している。調整は、頸部の外面にタテハケ・ナナメハケの後有段部周辺にヨコナデが施される。内面は頸部にヨコハケの後ヨコナデが施される。有段部における復元径は20.2cm、頸部径は13.0cmである。胴部を見ると、肩はあまり張らない。調整は、外面にはタテハケ・ナナメハケの後頸部付近にヨコナデが施され、内面には頸部と胴部付近にユビオサエの後ユビナデが施されており、ケズリも見られる。底部は端部が残存しておらず、後述するケズリにより整形されるタイプあるいはユビオサエにより整形されるタイプのどちらに対応するかは判明していない。調整は、外面にタテハケ・ナナメハケの後底部付近にヨコナデが施される。内面にはケズリが施される。二重口縁のものの方が、頸部付近にユビオサエが見られる個体は少ない。

12は今年度出土し、図化した個体である。復元した頸部径は14.0cmであり、頸部より上は器壁がやや薄くなる。外面には赤色顔料の塗布が確認できる。

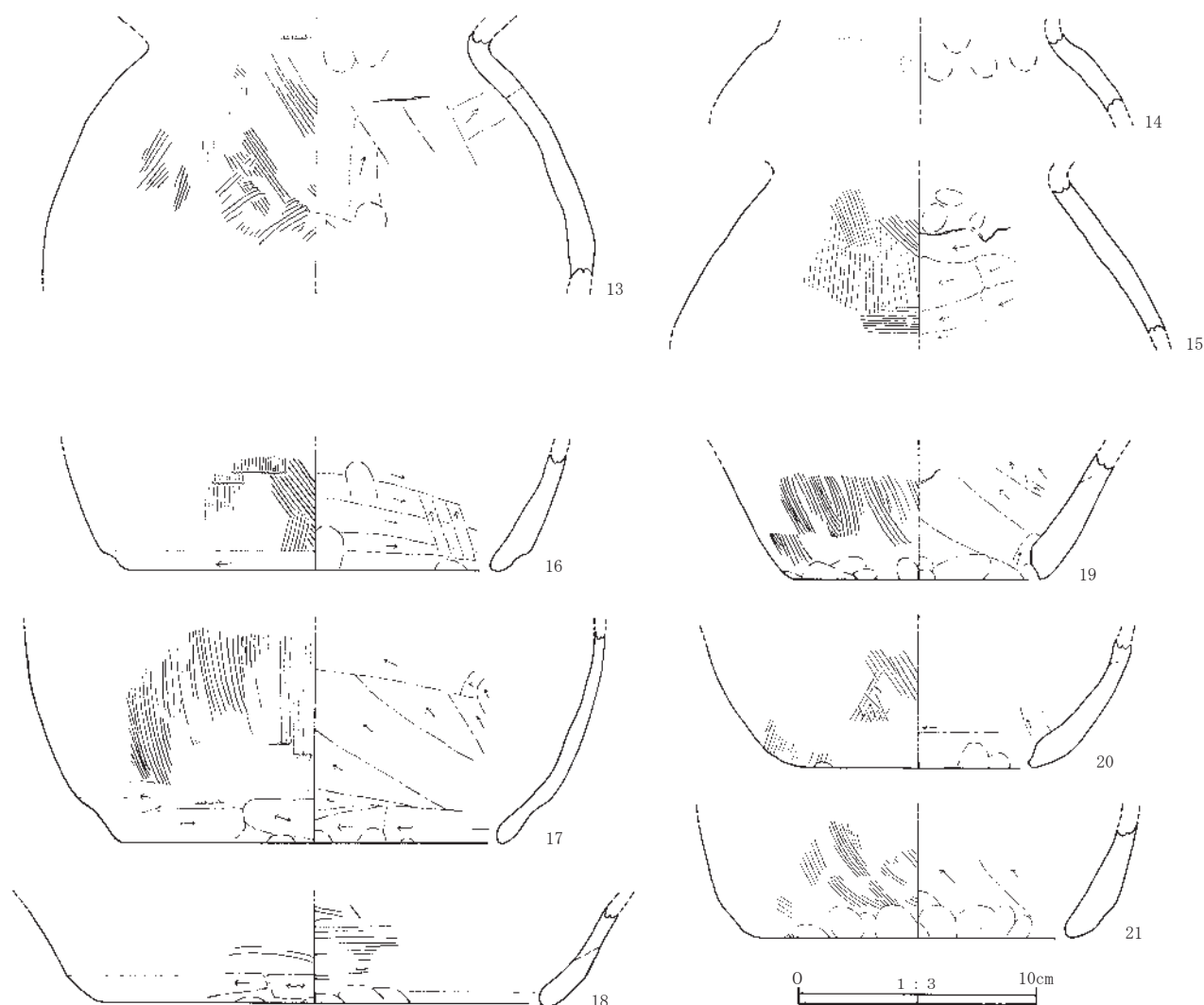
胴部（13～15） 単口縁・二重口縁のどちらに対応するかは13～15のいずれも判別できない。胴部には、あまり肩の張らないタイプ（1・7・15）とやや肩の張るタイプ（2・3・11・13・14）が存在する。調整は、外面にはタテハケ・ヨコハケ・ナナメハケが施され、内面にはユビオサエ・ケズリが施される。

14は今年度出土し、図化した個体である。外面にはタテハケの後ナデによる調整が、内面にはユビオサエによる調整が施される。

底部（16～21） 単口縁・二重口縁のどちらに対応するかは、どの底部も不明である。底部はすべて、粘土紐積み上げにより成形されている。底部は整形方法により、ケズリにより整形されるタイプと（16～18）とユビオサエにより整形されるタイプ（19～21）とに分けられる。調整は、外面にはタテハケ・ナナメハケ・ケズリ・ユビオサエが、内面にはケズリ・ユビオサエが施される。



第 17 図 6号墳出土壺形埴輪実測図 (1)



第18図 6号墳出土壺形埴輪実測図(2)

16は今年度出土し、図化した個体である。ケズリによる整形がなされている。調整は、外面にはタテハケ・ナナメハケが、内面にはナデ・ユビオサエが施される。(森)

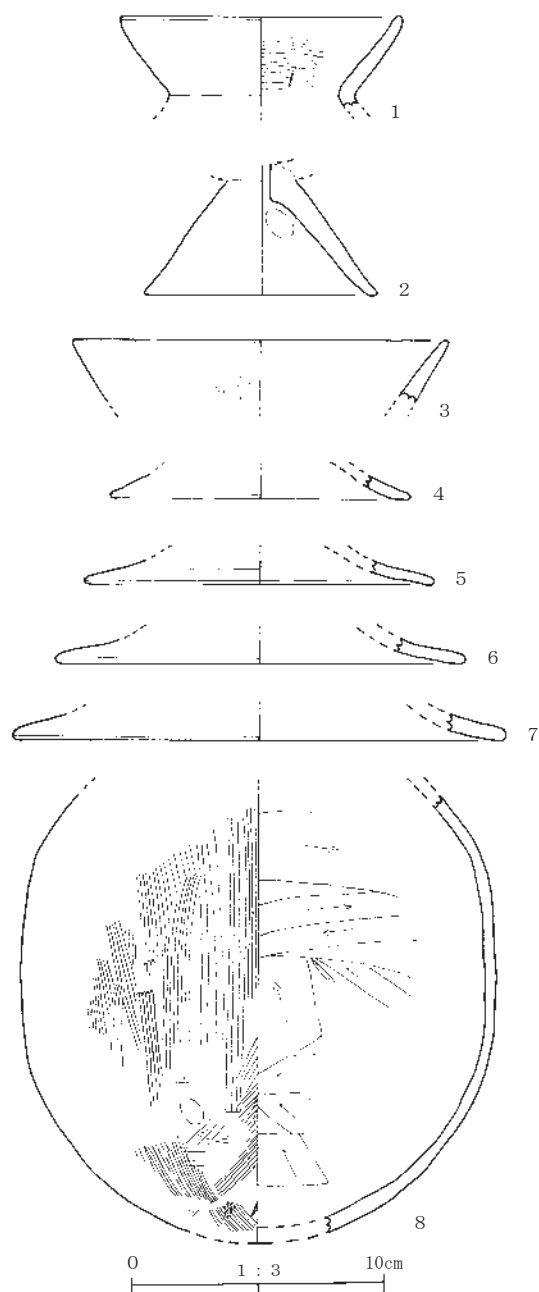
(2) 土師器 (第3～6次調査出土) (第19図、第10表)

今年度の調査では、土師器片が8点(南2トレンチ4点、採集4点)出土した。第3～5次調査出土のものも加えると計81点を数える。今年度出土のものもすべて破片で全形をうかがえるものはない。南2トレンチ内の南端部から出土した個体は原位置を留めていないが、墳頂平坦面から出土した土師器片に関しては、原位置を留めている、あるいは原位置に近い可能性が考えられる。以下、今年度出土の土師器に加え、第3～5次調査出土のものについても報告する。

小型丸底壺(1) 1は口縁部から頸部にかけて残存している。端部は面をもたず、丸く収める。調整は外面にヨコナデが、内面にはヨコハケの後部分的にヨコナデが施されている。口縁部は緩く内湾しながら開くようにのびる。復元口径は11.3 cmである。

器台(2) 2は今年度出土し、図化した個体である。上部に直径7 mmほどの穿孔、坏部との接合痕が確認された。穿孔は焼成前に上方向から行っていると推測される。

高坏(3～7) 3は坏部片である。端部は面をもたず、丸く収める。調整は、外面にタテハケの後ヨコナデが、内面にヨコナデが施される。外面には黒斑を有する。復元口径は15.0 cmである。4



第 19 図 6 号墳出土土師器実測図

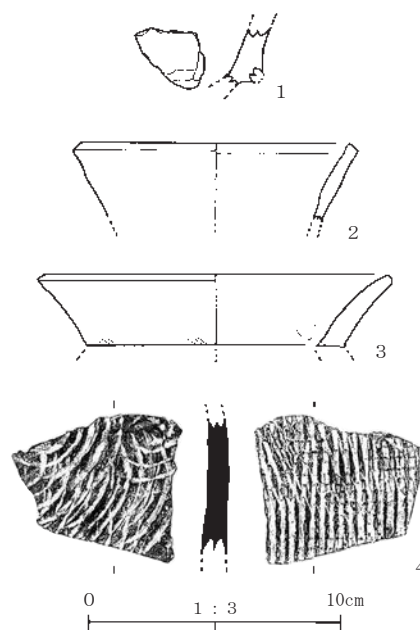
二重口縁壺 (1) 1 は二重口縁壺の第一口縁部から第二口縁部にかけての有段部である。調整は内外面ともヨコナデである。内面には赤色顔料が塗布されている。

中型壺 (2) 2 は中型壺の口縁部である。直線的に外傾し、端部はやや角張る。調整は内外面ともヨコナデである。内面には赤色顔料が塗布されている。復元口径は 11.5cm である。

甕 (3) 3 は甕の口縁部である。直線的に外傾し、端部はやや角張る。調整は内外面ともヨコナデである。ナデは細かく丁寧な施されている。内面にはコビオサエ痕が残る。外面には胴部との接合部分にハケメが残る。赤色顔料の塗布は確認できない。復元口径は 14.2cm である。

(2) 須恵器 (第 20 図)

4 は 8 号墳から北東に離れた地点で採集した甕片である。外面には平行タタキが施され、一部は擬格子状となる。内面には同心円の当て具痕が明瞭に残る。胎土は緻密で、焼成も良好である。(西)



第 20 図 8 号墳採集遺物実測図

～7 は脚裾部片である。調整は内外面と端部に丁寧なナデが施される。

甕 (8) 胴部は球形であり、底部は丸底と推測される。調整は、外面には 1 cm あたり 5 ～ 7 本のタテハケが施された後ナデが、内面には胴部上半部に横方向のケズリが、下半部には縦方向のケズリが施される。(森)

3. 8 号墳採集遺物 (図版 10 - 2・3)

(1) 土師器 (第 20 図、第 11 表)

今年度の調査では土師器片 16 点を採集した。いずれも測量基準点 H 98 付近で採集したものである。以下では、器種の確認できる 3 点について述べる。

第9表 6号墳出土壺形埴輪一覧表

No.	器種	残存部位	法量 (cm)			調整	色調	焼成	備考	出土地点	第50集掲載 No.
			口径	底径	器高						
1	壺形埴輪	口縁部～胴部	(20.4)	—	—	外：タデハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ナナメハケ・ヨコナデ・ユビオサエ・ケズリ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好 黒斑あり	胴部は長胴と推測。復元胴部最大径は20.6cm。残存長は28.0cm。単口縁。	北1トレンチ	1
2	壺形埴輪	口縁部～肩部	16.1	—	—	外：タデハケ・ナナメハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ナナメハケ・ヨコナデ・ユビオサエ・ユビナデ	外：明黄褐色 内：黄褐色	良好	復元胴部最大径は17.4cm。単口縁。	北1トレンチ	2
3	壺形埴輪	口縁部～肩部	16.5	—	—	外：タデハケ・ヨコハケ 内：ヨコハケ・ナナメハケ・ヨコナデ・ユビオサエ・ユビナデ	外：明黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好	肩部に明瞭なヨコハケが一周めぐる。単口縁。	西1トレンチ	3
4	壺形埴輪	口縁部	(14.6)	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好	単口縁。	西1トレンチ	4
5	壺形埴輪	口縁部	(17.4)	—	—	外：タデハケ・ナナメハケ・ヨコナデ 内：ナナメハケ・ヨコナデ	外：にぶい黄褐色 内：黄褐色	良好	単口縁。	南1トレンチ	5
6	壺形埴輪	口縁部～頸部	(21.0)	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：黄褐色 内：黄褐色	良好	単口縁。	墳頂トレンチ	6
7	壺形埴輪	有段部～第一口縁部	—	—	—	外：タデハケ・ナナメハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	外：黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好	復元有段部径は20.2cm。二重口縁。	北1トレンチ	7
	壺形埴輪	胴部	—	—	—	外：タデハケ・ナナメハケ・ヨコナデ 内：ユビオサエ・ユビナデ・ケズリ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好	復元頸部径は13.0cm。	北1トレンチ	7
	壺形埴輪	胴部～底部付近	—	—	—	外：タデハケ・ナナメハケ・ヨコナデ 内：ケズリ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好		北1トレンチ	7
8	壺形埴輪	有段部～第一口縁部	—	—	—	外：ナナメハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	外：黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好	復元有段部径は19.4cm。二重口縁。	東1トレンチ	8
9	壺形埴輪	有段部～第一口縁部	—	—	—	外：タデハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	やや不良	復元有段部径は16.8cm。	東1トレンチ	9
10	壺形埴輪	第二口縁部～頸部	(18.2)	—	—	外：タデハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好	復元第二口縁部径は18.2cm、有段部径は14.8cmである。二重口縁。	西1トレンチ	10
11	壺形埴輪	有段部～胴部	—	—	—	外：タデハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ナナメハケ・ナデ・ヨコナデ・ケズリ	外：浅黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好	復元有段部径は16.6cm、頸部径は12.0cm。二重口縁。	西1トレンチ	11
12	壺形埴輪	有段部	—	—	—	外：ナデ 内：ナデ	外：にぶい黄褐色 内：明褐色	良好	復元頸部径は14.0cm凹部に赤色顔料。他の部分にも薄く赤色顔料。	南2トレンチ	2019年出土
13	壺形埴輪	胴部	—	—	—	外：タデハケ・ナナメハケ・ヨコナデ 内：ユビオサエ・ケズリ	外：にぶい黄褐色 内：浅黄褐色	良好	復元頸部径は14.6cm、胴部最大径は23.0cm。	北1トレンチ	13
14	壺形埴輪	胴部	—	—	—	外：タデハケ・ナデ 内：ユビオサエ	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好		南2トレンチ	2019年出土
15	壺形埴輪	胴部	—	—	—	外：ナナメハケ・タデハケ・ヨコハケ・ヨコナデ 内：ユビオサエ・ケズリ	外：にぶい黄褐色 内：黄褐色	良好 黒斑あり	明瞭なヨコハケを肩部にもつ。復元頸部径は12.6cm、胴部最大径は23.8cm。	東1トレンチ	14
16	壺形埴輪	底部	—	(15.2)	—	外：タデハケ・ナナメハケ・ケズリ 内：ナデ・ケズリ・ユビオサエ	外：浅黄褐色 内：淡黄褐色	良好 黒斑あり	赤色の砂粒が入っている。	南2トレンチ	2019年出土
17	壺形埴輪	底部	—	(19.4)	—	外：ケズリ・ナデ・ユビオサエ 内：ナデ・ユビオサエ	外：にぶい黄褐色 内：浅黄褐色	やや不良	最終段階にて底部を削って整形、後にユビオサエ整形。工具によるヨコナデ。	東1トレンチ	15
18	壺形埴輪	底部	—	(16.4)	—	外：タデハケ・ケズリ・ユビオサエ 内：ケズリ・ユビオサエ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	やや不良	過去の報告分を底部と傾きを修正して再度図化。	北1トレンチ	16
19	壺形埴輪	底部	—	(10.8)	—	外：ナナメハケ・ユビオサエ 内：ケズリ・ユビオサエ	外：浅黄褐色 内：浅黄褐色	良好 黒斑あり	最終段階にて底部をユビオサエ整形。	西1トレンチ	17
20	壺形埴輪	底部	—	(9.7)	—	外：ナナメハケ・ユビオサエ 内：ケズリ・ユビオサエ	外：にぶい黄褐色 内：浅黄褐色	良好 黒斑あり	最終段階にて底部をユビオサエ整形。	西1トレンチ	18
21	壺形埴輪	底部	—	(12.8)	—	外：タデハケ・ユビオサエ 内：ケズリ・ユビオサエ	外：明黄褐色 内：浅黄褐色	良好 黒斑あり	最終段階にて底部をユビオサエ整形。	西1トレンチ	19

※（ ）は復元径。黒斑は残存部に確認できるもののみ記述。

第10表 6号墳出土土師器一覧表

No.	器種	残存部位	法量 (cm)			調整	色調	焼成	備考	出土地点	第50集掲載 No.
			口径	底径	器高						
1	小型丸底壺	口縁部～頸部	(11.3)	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	外：黄褐色 内：黄褐色	良好		墳頂トレンチ	1
2	器台	脚部	—	—	—	外：ナデ 内：ナデ・ユビオサエ	外：黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好		墳丘南側採集	2019年出土
3	高坏	口縁部	(15.0)	—	—	外：タデハケ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好 黒斑あり		墳頂トレンチ	2
4	高坏	脚裾部	—	(12.0)	—	外：ナデ 内：ナデ	外：黄褐色 内：黄褐色	良好		西1トレンチ	3
5	高坏	脚裾部	—	(14.0)	—	外：ナデ 内：ナデ	外：黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好		東1トレンチ	4
6	高坏	脚裾部	—	(16.0)	—	外：ナデ 内：ナデ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好		東1トレンチ	5
7	高坏	脚裾部	—	(19.9)	—	外：ナデ 内：ナデ	外：明黄褐色 内：黄褐色	良好		東1トレンチ	6
8	甕	胴部	—	—	—	外：ハケ・ユビオサエ・ナデ 内：ケズリ・ナデ	外：明赤褐色 内：灰褐色	良好	ハケメ単位幅広い。	東1トレンチ	7

※（ ）は復元径。黒斑は残存部に確認できるもののみ記述。

第11表 8号墳採集遺物一覧表

No.	種類	器種	残存部位	法量 (cm)			調整	色調	焼成	備考	採集地点
				口径	底径	器高					
1	土師器	壺	頸部	—	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：にぶい黄褐色 内：明褐色	良好	二重口縁。	H98 付近
2	土師器	中型壺	口縁部	(11.5)	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：明褐色 内：にぶい黄褐色	良好		H98 付近
3	土師器	甕	口縁部	(14.2)	—	—	外：ヨコナデ・ユビオサエ 内：ヨコナデ	外：浅黄褐色 内：浅黄褐色	良好	胴部との接合部にハケメがみられる。	H98 付近
4	須恵器	甕	胴部	—	—	—	外：平行タタキ 内：同心円当て具痕	外：灰褐色 内：灰オリーブ	良好		8号墳北東側谷

※（ ）は復元径。

4. 小結

(1) 3号墳出土遺物の時期

今年度の調査で、3号墳からはほぼ完形の小型丸底壺1点と土師器片6点が出土した。小破片である土師器片は時期の検討が難しいため、小型丸底壺と第5次調査で採集された須恵器片（図版7-1）に基づき3号墳の時期を検討する。

小型丸底壺は単口縁で、林田和人氏の分類の壺 Db 類（林田 2002）にあたる。口径が胴部最大径より小さく、この特徴より集成編年7～8期頃（林田編年3～4期）に位置づけられる。第5次調査で採集された3点の須恵器片はすべて甕の胴部片である。外面には平行タタキの後に部分的なナデが施される。また、内面は同心円文当て具痕をナデ消すが、うっすらと当て具の単位が見られる。こうした特徴より集成編年8期頃と報告されている（入江 2015）。これは小型丸底壺の時期と矛盾しない。

以上より、3号墳の時期は集成編年8期頃の可能性が考えられる。（松本青）

(2) 6号墳出土遺物の時期

6号墳からは壺形埴輪片、土師器片が出土した。両者の時期は第5次調査報告において、壺形埴輪・土師器ともに集成編年6期頃と位置づけられている（入江 2015）。

今年度6号墳より出土した壺形埴輪・土師器は、いずれも小破片であり、第5次調査報告でなされた時期的位置づけを修正するに至るまでの個体は存在しない。したがって、6号墳出土遺物の時期は前回報告の見解と相違ない。以下、時期決定の根拠となった特徴を簡潔にまとめる。

壺形埴輪の時期 胴部形態が長胴である、底部が粘土紐の積み上げによる成形で当初より底面を有さない、底部がわずかに肥厚するという3つの特徴、および長目塚古墳出土壺形埴輪の評価（竹中 2014）との比較から、集成編年5～6期に位置づけられた。

土師器の時期 これまでに小型丸底壺・器台・高坏・甕の4器種が確認されている。小型丸底壺・器台は小破片であり、時期決定に用いることが難しいため、高坏・甕による時期の検討がなされた。それによれば、高坏は集成編年4期～7期初頭頃（林田編年1～3期）に、また甕は幅の広いハケメが施されることにより、集成編年6期頃（林田編年2期）に位置づけられた。以上、土師器は集成編年4期～7期初頭までの様相を呈しており、なかでも甕は時期がより絞られ、集成編年6期頃の様相を呈する。したがって、土師器の時期は集成編年6期頃とされている。

以上より、6号墳の時期は集成編年6期頃であると考えられる。（森）

(3) 8号墳採集遺物の時期

今年度の調査では土師器片16点と須恵器片1点を採集した。それらのうち土師器片は墳丘北西側の墳端にあたる測量基準点H 98付近で、須恵器片は墳丘より一段下った北東側の谷で採集した。そのため、須恵器片が古墳に伴うものと明確に判断することは難しい。したがって土師器片に基づき8号墳の時期を考えるが、器種を判定できるのは二重口縁壺・中型壺・甕の3点のみである。

二重口縁壺は、林田分類の壺 A・Ca・Da 類にあたる（林田 2002）。この小片を時期的に位置付けることは難しい。中型壺は単口縁であり、直線的に外傾することから壺 Cb2 類に分類できる。これは集成編年6～8期頃（林田編年2～4期）に位置づけられる。甕は、口縁部が直線的に外傾するため、甕 Ab 類にあたる。これは集成編年6～8期頃（林田編年2～5期）に位置づけられる。

このように検討したが、3点とも小破片であるため、正しく位置づけることはきわめて困難である。したがって、上述からは集成編年6～8期頃（林田編年2～5期）の可能性があると推測が導かれるが、確実なことはいえない。今後の慎重な検討が必要である。（西）

八 まとめ

今年度は、南尾根グループ所在の3・6号墳および北尾根グループ所在の8号墳を調査した。調査によって得た新しい情報をまとめた後に、平原古墳群全体についての考察を行いたい。

3号墳 3号墳は2・6・7号墳と同じ南尾根上に位置している。第5次調査において、方墳の可能性が指摘されたため、墳丘規模・構造の解明を目的として、墳丘の西側に1つのトレンチを設定した。調査の結果、墳丘および墳端平坦面が確認された。墳丘は地山の上部に盛土が施されることで構築されている。地山と盛土の境界がおおよそ水平であるため、3号墳は地山を削り出すことによって整地を行い、その後に墳丘盛土を施すことで築造されたと考えられる。今年度の調査において、墳丘斜面に段築は確認されなかった。墳端平坦面は地山の削り出しのみによって成形されており、盛土はなされていない。墳端平坦面の外側の構造に関しては、今回掘り下げが十分でないため検討することが難しいが、墳丘を画する溝が形成されている可能性が考えられる。

トレンチからは、原位置を留めていなかったものの、ほぼ完形の小型丸底壺が出土した。小型丸底壺は林田分類（林田 2002）によると壺 Db 類にあたり、口径が胴部最大径よりも小さい。この特徴は集成編年7～8期頃（林田編年3～4期）に見られる。2014年度の第5次調査では墳丘西側斜面より須恵器の甕片が採集されている。時期は集成編年8期頃（TK 23 型式段階頃）に位置づけられており、今年度出土した小型丸底壺の時期と矛盾しない。したがって、3号墳は集成編年8期頃（林田編年3～4期）に築造された可能性がある。土師器のほかに、出土位置の詳細は不明だが、古墳築造後の堆積土から小型の石材片3点が、小型丸底壺の近くからやや大型の石材片2点が出土した。いずれも輝石安山岩である。これらの石材片には、丸くあるいは平坦に調整された箇所が確認できるため、箱式石棺材の一部である可能性が考えられる。なお、調査区において、葺石と考えられる円礫は確認できなかった。

6号墳 今年度は、墳丘南側斜面の上半部にトレンチを設定した。調査の結果、段築1段目上端と段築テラス面、段築2段目、墳頂平坦面を検出した。段築2段目の葺石および段築テラス面の小礫はすべて失われていたが、段築1段目上端の残存葺石上部に多量の転落石が確認できたことから、これら多量の転落石は、段築2段目や段築テラス面に施されていたものであると考えられる。過去の調査において、墳丘東側・西側・北側では墳端に見られた互いの比高差が段築1段目から墳頂に向かうにつれて解消される様子が確認されていたが、墳丘南側でも同様の様子が確認できた。

これまでの調査成果を踏まえると、6号墳は東西約31 m、南北約30 m、高さ3.7～5.6 mの2段築成の円墳と推定される。墳端平坦面は幅1.9～2.0 mである。墳端平坦面には礫が敷かれていない。墳端平坦面は基本的に地山を整地して成形されるが、墳丘南側では旧地形の制約により、地山を整地した後に盛土を行い成形される。周溝は存在しない。段築テラス面の残存幅は東側で1.4 m、南側で0.9 m程度、北側で1.5 m程度である。墳頂平坦面は東西12.6 m、南北9 m程度の楕円形を呈すると推測される。

遺物としては壺形埴輪片と土師器片が出土している。壺形埴輪には単口縁と二重口縁がある。第5次調査報告（入江 2015）では、6号墳の壺形埴輪が長胴の胴部形態である点、成形段階から底面をもたないわずかに肥厚した底部である点、長目塚古墳出土壺形埴輪の評価（竹中 2014）との比較から集成編年5～6期頃に位置づけられたが、今年度もその評価は変わらない。土師器は小型丸底壺・

器台・高坏・甕片が確認された。土師器の時期もこれまでの評価と変わらず、集成編年 6 期頃である。よって、これらの遺物の時期から 6 号墳の築造時期は集成編年 6 期頃と推定される。

8 号墳 8 号墳は北尾根グループに所在する古墳である。北尾根グループは 8 号墳をはじめとして以前より、その存在が指摘されていたものの（熊本県教委 1998）、古墳数や分布様相などの実態は不明であった。そこで今年度、北尾根グループの実態解明の第一歩として 8 号墳の測量調査を行った。

調査の結果、8 号墳の墳丘規模と構造の一端が確認された。墳形は円墳で、墳丘規模は東西 60.3 m、南北 65.5 m 程度と推測され、これは肥後地域のなかでも最大級の円墳である。墳丘斜面では段築テラス面と考えられる平坦地形がいくつか認められた。これに基づき段築構造を復元したところ、墳丘の東側では 4 段、西側では 3 段の段築を有する可能性が考えられた。

遺物は、北西側の墳端にあたる測量基準点 H 98 付近において土師器の壺・甕片を採集している。壺のうち中型壺は単口縁であり、直線的に外傾することから林田分類の壺 Cb2 類にあたる。これは、集成編年 6～8 期頃（林田編年 2～4 期）に中心があるとされる。甕は直線的に外傾する口縁部片であり、林田分類による甕 Ab 類にあたる。これは、集成編年 6～8 期頃（林田編年 2～5 期）に中心があるとされる。したがって、これら遺物の時期から、8 号墳は集成編年 6～8 期頃（林田編年 2～5 期）に築造されたとの推定も可能である。

平原古墳群 以上の検討結果に加え、過去の調査成果を踏まえると、1・3・6・8 号墳はいずれも古墳時代中期に収まることがわかる。阿蘇谷地域では前方後円墳である長目塚古墳に代表されるように、中期になると前期では見られなかった、明確なマウンドをもつ古墳の築造が開始される。肥後地域においては古墳時代中期前葉から、それまで主流であった海沿いにすすむルートに加えて、河川づたいにすすむ内陸ルート、熊本平野の東端をすすむ内陸ルートが新しく整備されることが指摘されており（杉井 2010）、平原古墳群の築造もこれに連動したものであるとも理解できよう。このことから平原古墳群の造営主体は、古墳時代中期の新たな交通ルートの整備を背景に台頭した首長層と考えられる。

今後の課題 3 号墳は、墳形の確認および墳丘構造の解明を目的としたが、連日の降雨の影響により、思い通りに作業が進まず、1 つのトレンチの設定にとどまった。そのため墳丘構造の解明には至らなかった。今後、複数のトレンチを設けることにより、円墳であるのか方墳であるのかを明確にする必要がある。6 号墳の発掘調査は 2012 年に開始され、今年度で四回目である。これまでの調査で墳丘の東西南北にトレンチを設けたことにより、墳丘規模や段築構造を一定程度解明することができた。第 5 次調査では墳頂部に 2 つのトレンチを設定したが、埋葬施設を確認するには至っていないため、今後新たなトレンチの設定が必要となるだろう。8 号墳は測量調査を行ったことにより、東西 60.3 m、南北 65.5 m の墳丘規模をもつ円墳である可能性が考えられた。肥後地域で最大級のこの円墳は、阿蘇地域にとどまらず、さらに広い範囲の社会動向のなかに位置づけて考察する必要がある。議論を一步進めるためにも、さらに築造時期を絞り込む必要があるだろう。最後に、北尾根グループと南尾根グループの関係であるが、不明な点がまだ多い。8 号墳を集成編年 6～8 期頃に位置づけたことにより、北尾根グループと南尾根グループの造営時期が並行する可能性が高まった。北尾根から南尾根へ、あるいは南尾根から北尾根へという単純な古墳築造の変遷を辿るのではなく、北尾根と南尾根を行ったり来たりする形で古墳群を形成した可能性も考えられる。あるいは、複数系列での古墳築造の可能性も想定されるが、今、その結論を導き出すことはできない。次年度以降も調査を続け、平原古墳群の全容把握に努めたいと思う。

（小堀）

引用・参考文献

- 阿蘇の狩人の会 1998「阿蘇周辺地域における旧石器文化新資料の紹介」『肥後考古』第11号 肥後考古学会 pp.117-134
- 阿蘇町教育委員会 1989『小倉林道石棺発掘資料』
- 阿蘇市教育委員会教育部教育課世界文化遺産推進室 2016「1 歴史概要」『「阿蘇の文化的景観」保存調査報告書』Ⅰ：総論 阿蘇市教育委員会教育部教育課 世界文化遺産推進室 pp.29-30
- 阿蘇町町史編さん委員会 2004a『阿蘇町史』第1巻 通史編 阿蘇町
- 阿蘇町町史編さん委員会 2004b『阿蘇町史』第2巻 資料編 阿蘇町
- 入江由真 2013「壺形埴輪」『考古学研究室報告』第48集 熊本大学文学部考古学研究室 pp.30-35
- 入江由真 2015「七 遺物 4. 小結」『考古学研究室報告』第50集 熊本大学文学部考古学研究室 pp.61-63
- 岩本政教ほか 1995『土地分類基本調査 阿蘇山・竹田』熊本県企画開発部土地対策課
- 大隈彩未 2015「一 位置と環境 1. 地理的環境」『考古学研究室報告』第50集 熊本大学文学部考古学研究室 pp.1-2
- 緒方 徹編 2000『阿蘇町遺跡地図－阿蘇町遺跡詳細分布調査－』阿蘇町教育委員会
- 緒方 徹編 2011「附論 平原B遺跡－平原B遺跡内発見の火葬墓緊急調査－」『宮山遺跡』Ⅱ 阿蘇市文化財調査報告第2集 阿蘇市教育委員会 pp.173-193
- 緒方徹 2016「1 遺跡分布からみた土地利用」『「阿蘇の文化的景観」保存調査報告書』Ⅱ：詳細調査 阿蘇市教育委員会教育部教育課世界文化遺産推進室 pp.77-80
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会 pp.1-70
- 清田純一編 1982『陣内遺跡』阿蘇町文化財調査報告第2集 阿蘇町教育委員会
- 熊本県教育委員会 1998『熊本県遺跡地図』
- 島津義昭 1982「阿蘇の古墳」『えとのか』第19号 新日本教育図書 pp.85-86
- 島津義昭 1983「阿蘇の先史時代」『えとのか』第22号 新日本教育図書 pp.84-95
- 杉井 健 2010「肥後地域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」『九州における首長墓系譜の再検討』九州前方後円墳研究会 pp.131-184
- 杉井 健 2011「熊本県阿蘇市中通古墳群の基礎的研究1－東岳川西側の古墳群名称の整理」『熊本古墳研究』第4号 熊本古墳研究会 pp.13-14
- 杉井 健 2013「調査経過と古墳分布」『考古学研究室報告』第48集 熊本大学文学部考古学研究室 pp.16-21
- 杉井 健 2015「平原古墳群における古墳の分布」『考古学研究室報告』第50集 熊本大学文学部考古学研究室 pp.31-34
- 高橋 徹 1992「九州」『古墳時代の研究』第9巻 古墳Ⅲ 埴輪 雄山閣出版 pp.81-89
- 竹中克繁 2004「九州壺形埴輪研究序論－壺形埴輪の変遷とその意義－」『熊本古墳研究』第2号 熊本古墳研究会 pp.13-32
- 竹中克繁 2014「埴輪」『長目塚古墳の研究』2010～2013年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書 熊本大学文学部 pp.69-83
- 田中伸廣 2000『一の宮町史 自然と文化阿蘇選書⑧ 阿蘇山と水』一の宮町
- 田辺昭三 1982『須恵器大成』角川書店
- 留野優兵編 2014「平原古墳群調査報告2」『考古学研究室報告』第49集 熊本大学文学部考古学研究室
- 中村 浩 1978a「考察」『陶邑』Ⅱ 大阪府教育委員会 pp.210-243
- 中村 浩 1978b「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑』Ⅲ 大阪府教育委員会 pp.168-241
- 野田拓治 1983「阿蘇の古墳文化」『えとのか』第22号 新日本教育図書 pp.38-40
- 林田和人 2002「肥後における中・後期の様相」『古墳時代中期・後期の土師器－その編年と地域性－』九州前方後円墳研究会 pp.117-144
- 広瀬和雄 1991「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編 山川出版社 pp.23-26
- 文化財研究会 1983「阿蘇町小倉古墳群第1次測量調査報告概要」『熊本短期大学連合会会報 研究論集』第38号 熊本短期大学 pp.81-83
- 文化財研究会 1984「阿蘇町小倉古墳群第2次測量調査報告概要」『熊本短期大学連合会会報 研究論集』第39号 熊本短期大学 pp.69-74
- 松本幡郎 1983「阿蘇の成り立ち」『えとのか』第22号 新日本教育図書 pp.84-88
- 宮崎敬士 2010『小野原遺跡群 第1分冊』熊本県文化財調査報告 第257集 熊本県教育委員会
- 宮崎敬士 2019『幅・津留遺跡 第1分冊』熊本県文化財調査報告 第336集 熊本県教育委員会
- 森 浩一編 1990『古代学研究』第123号 古代學研究會
- 安田未来編 2013「平原古墳群調査報告1」『考古学研究室報告』第48集 熊本大学文学部考古学研究室
- 山元瞭平 2014「出土遺物」『考古学研究室報告』第49集 熊本大学文学部考古学研究室 pp.22-26
- 與嶺友紀也・入江由真編 2015「平原古墳群調査報告3」『考古学研究室報告』第50集 熊本大学文学部考古学研究室
- 渡辺一徳 2001『阿蘇火山の生い立ち』一の宮町史 自然と文化 阿蘇選書7 一の宮町
- 渡辺一徳・小野晃司 1992「（1）阿蘇火山」『日本の地質9九州地方』共立出版 pp.215-218

挿図出典

第1図 安田編 2013

第2図－1 緒方編 2000

第3図 與嶺・入江編 2015